

源氏物語筆書



陈文恪语



为致流花书

萃源字



華式源氏之起源

一享保十三年の頃於大佛妙法院宮御歌合のせつ當流先師淨雪翁に上覽の連花仕べきよし仰付られし時其席の違ひ棚飾りに光源氏の物語の巻を飾り付有之由淨雪雪江兩師心付源氏物語の心をこめし生花大廣間數瓶仕れは御感不斜とて御歌合の御鬱散も相叶ひ夫より御歌合の度に連花仰付られければすなはち源氏五十四帳の生方相調ひ御稱美有りことなり此華式源氏之卷は其後世の變遷代々の家元に依り華式も種々變りしかは本書にて之を統一す

然而今後益々華道の進歩に従ひ一層研究改式もあるへきも
當流の一秘事として華流亭世々相傳のもの也

華流亭第拾參世 林 皐泉 するす

一、桐 壺

いつの御時にか帝に寵姫あり桐壺の御殿に住し更衣なりしかば、世に桐壺の更衣と呼べり、
更衣皇子を生む其の美貌比なく帝の御寵愛日に増しぬ、教多の女官の妬み益々加わりて更衣は
遂に病の床に就き、病勢次第に加はり、其母泣いて奏請し、漸くにして御許を得て宮中を退出
して實家に歸りしが、帝の御歎きと若宮とをのこして遂に身まかりぬ、帝は深く悲しみ給ひ葬
送の日には特に勅使を立て、贈位あらせられ、又懇ろに老母をいたはり若宮を憐み給ひて
左の一首をおくらる。

宮城野の露ふきむすぶ風の音に

小萩がもとをおもひこそやれ

(註) 宮城野は陸奥の名所なるも此所にては宮中の心なり露ふきむすぶは涙を催すの意風は
野分の風小萩は若宮なり

花 説

頃 花 花 生

器 材 方

夏 壺

桐小菊 (黄又は白)

桐は終り菊は咲き初めけるに依りて恥しけに生けあしらいにあらず、眞に桐の奥より副ひ
根元見へずとも不若、桐と花器の壺とにて殿舎の桐壺と見立て、小菊は若宮にして更衣若
宮を抱いて殿舎に座する所なり

ふ (註) 尙更衣の實家は勅命に依り普清され後源氏の君の私邸として賜ふ之を二條院と云



二、箒

木

若宮は七歳の御時讀書始めの儀を行はせられたるに、天資聰明にして上下將來の御運如何にと評し給へり、当時藤壺の女御は年十六、花の如き皇女にして若宮と共に帝の御寵愛を受けらるゝに依り、世人仇名して若宮を光の君と云ひ、女御を輝く日の宮と呼べり、若宮は十二才にして元服し、同時に左大臣關白の女葵の君を配偶者として臣下に降し源氏の姓を賜はる。

或る淋しき夜源氏は葵の君の兄頭の中將と桐壺の宿直所にありし時、頭中將は「私は或る時一人の戀人がありましたが、度重なるにつれ捨てかたくなり女の子迄設けました、女には兩親もなく我を頼りにして居りましたに、我妻この事を知りて嚇かしたさうです、久しく行かなかつたら何所かへ消へ失せました。さためし苦勞をして居る事でせう」あたかも武藏野俗談に云へる箒木の歌に

その原やふせやにおふるは、き木の

ありどは見えて逢わぬ君かな

此の歌によく似た斬でせうと物語れり

花 説

頃	夏 秋
花	器 五重切
花	上重 二重 白二種 三重四重 赤二種 何れも草花、五重しのぶ
生	方 材

上重二重は窓の内に、三重四重は随分枝葉繁りて出張りたる様に生くべし、五重はしのぶなり

(註) 上重二重共窓の内に生くるは即ち頭中將の情は母子の消え失せたる所の意、三重四重は上重二重を消ゆる体にせんが爲張り出すものにしてしのぶ草はしのぶると云ふ意にて思ひ出すことなり。



三、空

蟬

源氏の君は或夜方除のため外泊せねばならずして、紀伊守の家に行けり、眠られずして次の室の話聲聞ゆ、其女は紀伊守の父伊勢の介の後妻なりしが、源氏の君は昔日の情忘する、能はず物思ひに沈み居れり。或夜空蟬の弟小君の案内にて其室に入る、忽ちにして源氏の君の來れるを知るや、窃に寢床を抜けて次の室に隠る、源氏の君はそれ共知らず傍に寄るや戀人にあらずして其人の寢床は藻抜けの殻なりしなり、其折空蟬のゆぎ捨てありし薄衣をそつと持ち歸り寝むられぬまに疊紙に

空蟬の身をかえてける木のもとに

なほ人からのなつかしき哉

と筆すさびぬ

(註) 身をかへけるは蟬の脱けたるを云ふ、我をいとひて逃げかくれたるはうらめしけれどせめて薄衣だけでもなつかしと云ふ意なり

花 説

頃 夏 一 重 切
 器 檀 得 花
 材 檀 得 花
 方 檀 得 花
 生 花 花 頃

序に花を用ひず卷葉を序として蟬の尻と見る葉を羽の氣持に用ひ、花は急と前置きの間に遺ふ蟬は下向にとまる形なり。

(註) 明教に太子年十九才二月八日夜乘馬出、自北門至檀得山より抜け出づると云ふより檀得に通ずる檀得花を用ふ



四、夕 顔

源氏の君は五條に住む乳母の病氣見舞に行けり、其隣邸に夕顔の君といへる女主人の隠家あり、塀に夕顔の花咲き居たれり、源氏の君は其夕顔の花を所望したるに、内より十二、三になる美しき少女出で來り花を扇に戴せて差し出したり、其の扇面に

心あてに夫れかとぞ見る白露の

光そへたる花の夕顔

之が縁となりてしばしば訪れたり、或日夕顔の君と侍女の右近とを伴ひ河原の院に泊れり、其夜半夕顔の君は急死す、源氏の君は死骸を東山の庵室にて茶毘に附し、其形見に右近を連れて二條院に歸りしが右近の話によりて、この夕顔の君は頭中將の情人である事を知りたり

花 説

頃 花 器 手 附 置 籠 秋
 花 材 夕 顔 赤 草 花
 生 方

手に巻き付け花無き蔓を上より下け葉裏をみせ、下よりは花を生け登し上の蔓の裏葉と行き逢ふ様に生くる事手なり。前のあしらひは少女（後の玉かつら）なり



五、若

紫

源氏の君は瘡を病み北山の某寺に、病を治すに妙を得たる聖あるを聞き、お加持を受ける爲め参籠せり、山中を歩み見るに寺の下に数多くの僧坊あり、中に小柴垣美しき坊の廣く清けなるに若き女ども見ゆるあり、其夜招きにより僧都の坊に行けり、尼の事を問ひたるに、尼は按察使大納言の未亡人にて私の妹に當り、病氣の爲に参つて居りますが、一人娘がありまして兵部卿の宮様お通ひになり、女の子が出來ると姪は亡くなりましたと僧都は物語れり。

兵部卿親王は藤壺の女御の兄宮なり。源氏の君はこの娘を今の内貫ひ受け思ふまゝに教育して妻にしたしと思ひ僧都にはかりたるに、何心なき少女なればとて笑ひ居れり。かくて瘡も全く癒え京に歸りしも少女の事忘れ難く

手につみていつしかも見む紫の

ねにかよいける野邊の若草

(註) 根にかよいけるは藤壺女御のゆかりなり、いつかは我物にすべきの心なり

と獨り口すさび居たり、尼は山寺に於て失せれば、姫君は明日父宮のお邸に移らる、由を聞き源氏の君は手中の玉を奪ひ去られる思にて意を決し、小さき人を一人隠したればとて罪にもなるまじと思ひ、惟光を隨へて山寺に至り、姫に一言云ふて置きたいと云ひつゝ、凡帳の中に入りて眠れる姫君を自ら抱き起して、女共の止むるをも聽かず車に乗せ、少納言の乳母もしかたなく同車し夜明け方二條院に歸れり。

花 説

頃 花 器 水 秋
 花 材 紫 指
 生 方 苑

葉を手厚く花を軽くやさしく生けて、紫苑の元葉花器の様なる處心得あるべし、野邊の若草を植へかへたる意にて元葉を花器の如く水指を台と見るなり、而して花器水指は淺からず思ふと云ひ影を見えずと云ひし山の井の縁に由るなり。



六、末摘花

左衛門の乳母の娘大輔の命婦と云ふは浮氣者なれども、面白き女故源氏の君は呼び寄せて使用することあり

或時命婦曰く常陸の宮の姫様は父宮様去り給ひて後は、一層窮乏して居られる由を語れり、源氏の君は姫君に屢し文を送り又命婦の手引にて直接に談話をすることとなり、襖子をへだてて戀を語りしに、姫君は最初より一言も發せず、乳母の侍從之を見かね襖子の内より姫君の聲色を使ひ「最後の御返事をいたすが厭でいつ迄もあなたのお文が見たいのは何故でせう」と云ひければ、源氏の君は襖子を開て入りたれば、命婦は体よく席をはづせり、源氏の君はどんな顔をせるか見たく思ひ、見ぬ振りして能く見れば其容貌の醜く、唯髪の長きが美しきのみにて着衣も粗末にして、寄るべなき孤獨の境遇の姫なり源氏の君は之に同情の念湧き來りて、永く妻の一人として保護せんと思ひ種々着衣や生活費を仕送りたり

姫君から送られた手紙の端に源氏の君は手習ひの様に

なつかしき色ともなしに何にこの

未摘花を袖にふれけむ

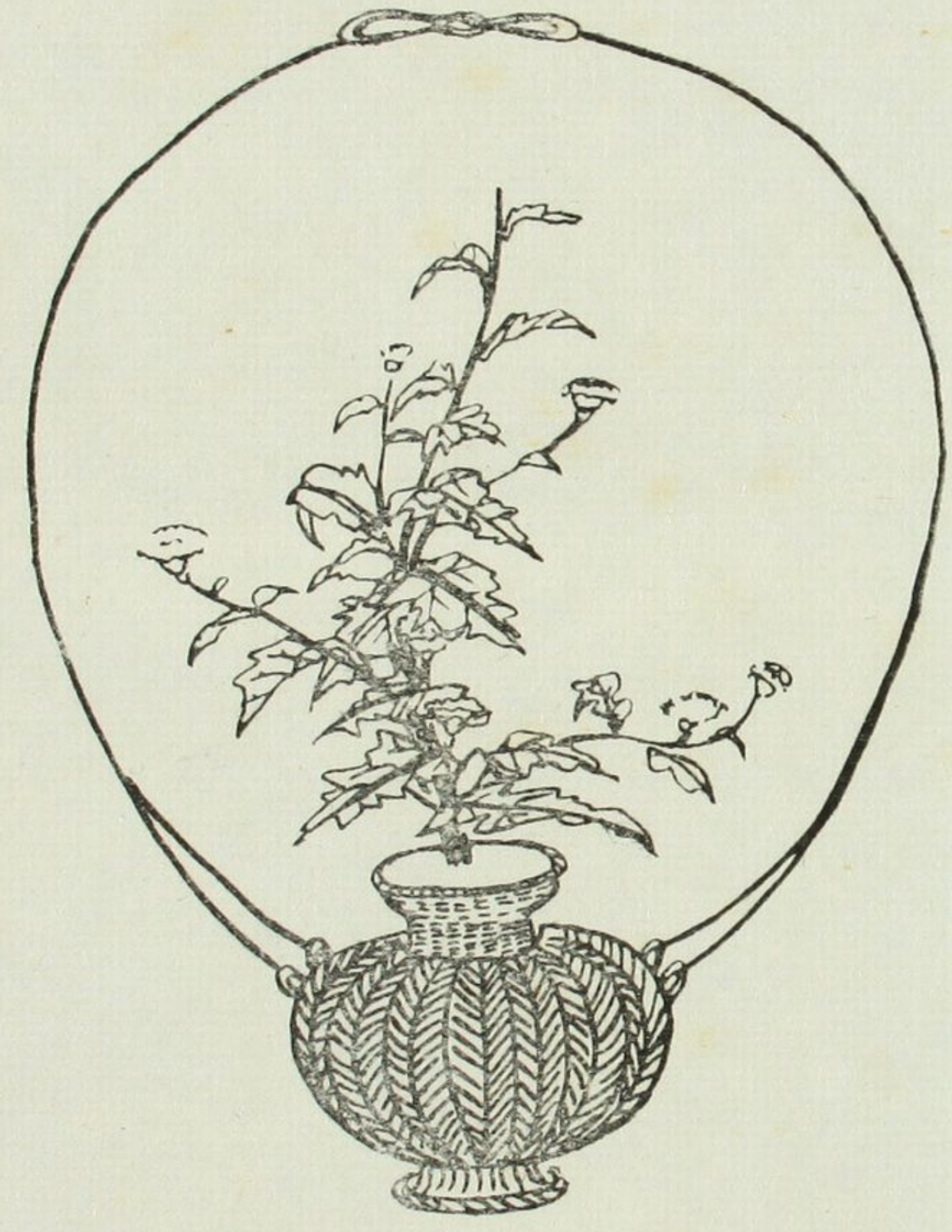
と書けり

正月七日宮中白馬の節會の終りて、未摘花を訪いて歸るとき袖で顔を隠しながら見送りたるに袖の横から例の畸形の鼻出て居たり

花 説

頃	夏
花	手附置籠
花	紅花(あざみにても不苦)
生	方に花を摘みたるものを遣ふ

(註) 紅花は一名未摘花とも云ふ花の末の方より摘みて紅に製するなり故に此の名あり、籠の手は未摘花の君が袖を以て顔を覆ひたる所にして、序に花を摘みたるものを遣ふは未摘花の縁によりて美しき花を摘み取られて醜くなれる所即ち未摘花の君が醜婦なることを現すなり。



七 紅 葉 賀

帝は五十の齡にならせ給ひ、十月紅葉の盛に朱雀院にて御賀を行はる、事となりたり、御寵愛の藤壺の宮が御病氣の爲この催を観る得わざるを残念に思ひ、其催の豫習を宮中にて行ひたりこの時源氏の君は頭中將と共に青海波を舞しが、實に美事なる出来ばえで、帝も藤壺の君もお賞讃あらせられしが、源氏の君と屢しば御忍びありしかば、この心の曇なくして観るならば一層面白かるべしと思へり、其夜源氏の君より

物思ふに立舞ふべくもあらぬ身の

袖打ふりし心しりきや

と送れり、

十月十日過ぎの行幸は大勢の宮人が供奉し、紅葉の陰にて樂人達の吹く音色に散り交ふ紅葉の中より、青海波輝き出で世にも美事に面白く見へたり。

花 説

頃 秋
 器 手付水指
 材 松、紅葉、白草花
 方 生

松横なびきの細き晒松よろし、松は經く前副の意にて生け紅葉は澤山に松と紅葉と交り合ふ様水際随分奥深く生けなす可し、全体低く横平なる形なり夫故にあしらひにて深みを取る事肝要なり。

白草花（源氏の君と見立て）紅葉の陰にて青海波を舞ふ所にして、松は樂人の吹き立つる音にして松風の意に遣ふ。



八、花 宴

源氏の君十九才の歳の二月二十日過ぎ、南殿の櫻盛りなりしかば花宴を催されたり酒宴たけなはとなり、源氏の君は櫻の枝を持ちて春鶯轉を舞へり夜更けて、源氏の君は若し隙あらば藤壺女御に唯一言にても物申さんと思ひ、弘毅殿の細廊下に立寄れば、歌口すさみつ、歩み寄る女ありふと袖を捕へたれば、驚きて誰ぞと云ふ、源氏の君は

深き夜のあはれをしるも入月の

おほろけならぬちぎりと思ふ

との歌を送り

(註) 朧月夜をめであるき給ふは我に逢ひ給ふべき契の御方なるべし、左様によそくしうする物にあらずと云ふ、其聲に之が源氏の君であることを察し安心なせり、程なく夜も明けゆけば二人は扇をとりかわし立別れたり(此の君は後の朧月夜の君なり)

花 説

頃 春
 器 月輪付置二重
 材 櫻一式
 方 上 蕾 下開花を生るなり

藤壺の后を尋ね（開花）に至りて朧月夜（蕾）に遇ふの意にして櫻の宴なるが故に櫻一式なり、又櫻は下部より花開き始め上部に至るほど蕾なり、月の輪の置二重は朧月の意にて用ふ。



九、葵

加茂の葵祭の日は来りぬ、源氏の君は紫の君と同車して見物に出掛けたるが、大雑沓にて何處に車を立てんものと戸惑ひ居たりしに「此方へお出なさいませこの場をお譲り致しませう」と云ふ者あり、見れば其所に例の源内侍が居たれり、この女は過る日頭中將が通ひし考なるも、源氏の君も亦好奇の人にて、之に忍び寄りし事ありし故、何氣なくも不快の心地せり、然し女は再會をよろこび扉の端を折りて

はかなしや人のかざせるあほい故

神のしるしの今日を待ちける

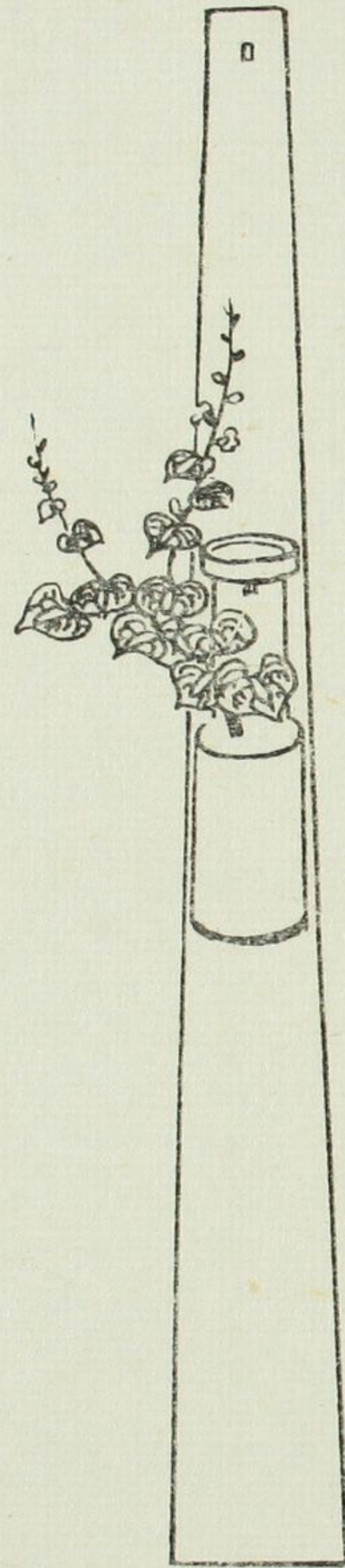
とおくれり

花 説

頃 夏 一重切
 花 器
 花 材 葵 (何れの種類にても不苦)
 生 方

花器の窓の間に葵澤山に生けて窓の中に生け閉るよし

(註) 葵は異名かざし草もろ葉草とも云ふ山城の國加茂神社に葵祭と云へるあり、人皆頭にさしたる葵はあふひにて逢ふ日に通ず源氏の君が、八十氏人のなべて逢ふ日をと詠せし如く人々頭に挿せるより、花器窓の間葵澤山に生けるなり。



一〇、 榊

陛下は太上天皇におなになり御代が一變すれば、伊勢神宮の齋宮も替るので、此の度は六條の君が前の皇太子の女御があつた時に、お生れした女王が齋宮に任せられたり。六條の君も齋宮と共に伊勢に發向の日も近づきて其の支度に忙しき折、源氏の君より對面いたし度しとあり九月の七日頃なれば秋の花は皆衰へて、淺茅が原も枯々となる、虫の音に松風凄く吹き合せての何れの爪音とも聞き分け難き物の音ども絶へぐに聞へていと艶なり。

齋宮の御所野宮は小柴垣を圍らし所々に板葺の假屋あり。

丸木の鳥居も流石に神宮とも此所、彼所に咳の聲

始めは人傳の消息ばかりにて自らは對面せざりしも、源氏の君の言葉故止むを得ぬ風を装ひ簾の傍迄膝間付き出でたれば、榊を聊か折りて持ち居たるを簾の間より差入れて、變らぬ色をしるべにてこそ忌恒を越へたりと云へば、六條の御息所の歌に

とあり。

神垣はしるしの杉もなきものを
いかにまがへて折れる櫛そ

花 説

頃	花	花	生
秋	器	材	方
寸	櫛	櫛、	
切		白中菊	

眞の花なり破の手の枝和らぎたるがよろし、中菊は前副へなり。
源氏の君櫛を開きて櫛を差入る、所にして白中菊は源氏の君に見立て、破の手を和くは櫛を開ける所なり。
齋宮の居所にして神々しき所故花を眞に生くべきなり。



一一、花散里

源氏の君の未だ御在位の御時、麗景殿の女御と云ひしは、一人の御子もなく陛下崩御の後は頼るべき人もなし、其妹三の君は以前より源氏の君の情人なりし爲め、蔭より生活を助け居たり五月雨の頃、京極あたりの閑地に誘ひ、昔の事ども掻き連ね夜の更ける迄嘆かる軒端に郭公泣きければ、源氏の君は

橘の香をなつかしみ郭公

花散る里を尋ねてぞ訪ふ

とあり

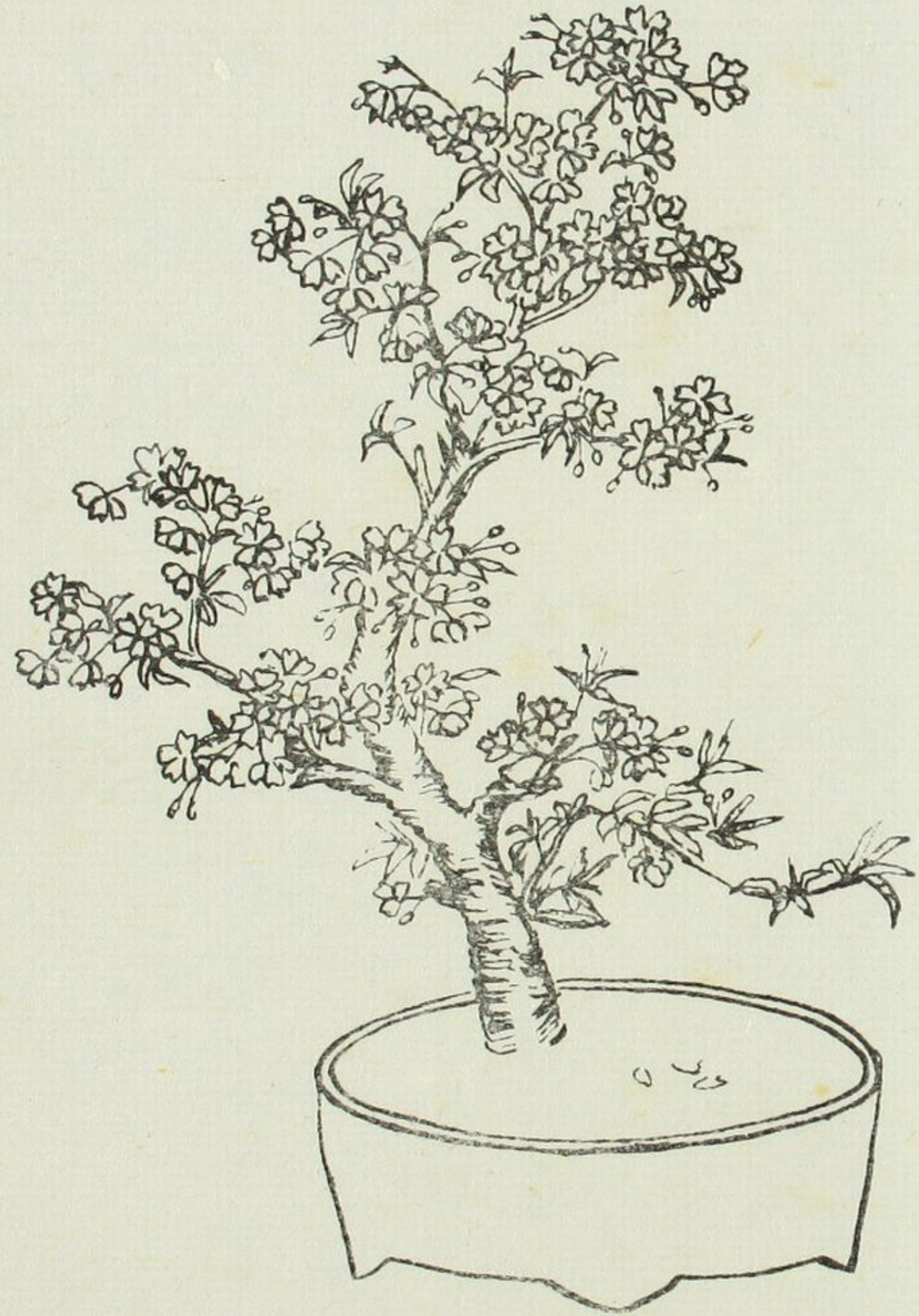
花 説

頃 春 馬 盥
 器 櫻
 花 材
 生 方

櫻を生け、水際の根元より葉櫻を副ふべし、花器の水中に散花を浮す事肝要なり。

此卷の名は女御の様を花散る里に詠みたる歌より取り、夫より三の君の稱呼となりしものにして、副ひは即ち花散里なり。

櫻は一名おもひ草とも云ふ、源氏の君のおもいぐさの縁によりて櫻を遣ひ、親株を女御とす。水中に花を散らすは副の花の散りたりとの意なり。



一一一、須磨

太上天皇崩御の後右大臣政治を左右するに至り、朧月夜の君（六の君）は尙侍として宮中に入り、弘毅殿に住みて陛下の御寵愛を受くるにか、はらず、源氏の君のことは心を去らざりしが夏の頃病氣のため退出せし時、源氏の君は夜毎に通ひけり、陛下の寵姫をぬすみし罪名の下に源氏の君は官爵を削られたり、その爲暫く身を退けて須磨の閑地に流離すべく決心したり、かくて七八人の家來を連れて悄然と須磨の地に移れり、此の地は海面より稍々入りて哀れに凄けなる山中なり、母屋や廊下は茅や蘆で葺き、領地から人を呼び寄せて樹を植ゑ、池を堀らしたれば、斯る折でなくば風流にて面白からんも話すべき相手もなく、永き月日を如何に過すべき、漸く事静り行くに長雨の頃になりて懐郷の念切なり、折しも美しき月上りて一入都戀しく使を出したり。藤壺の尼宮には

松島のあまの苦屋もいかならん

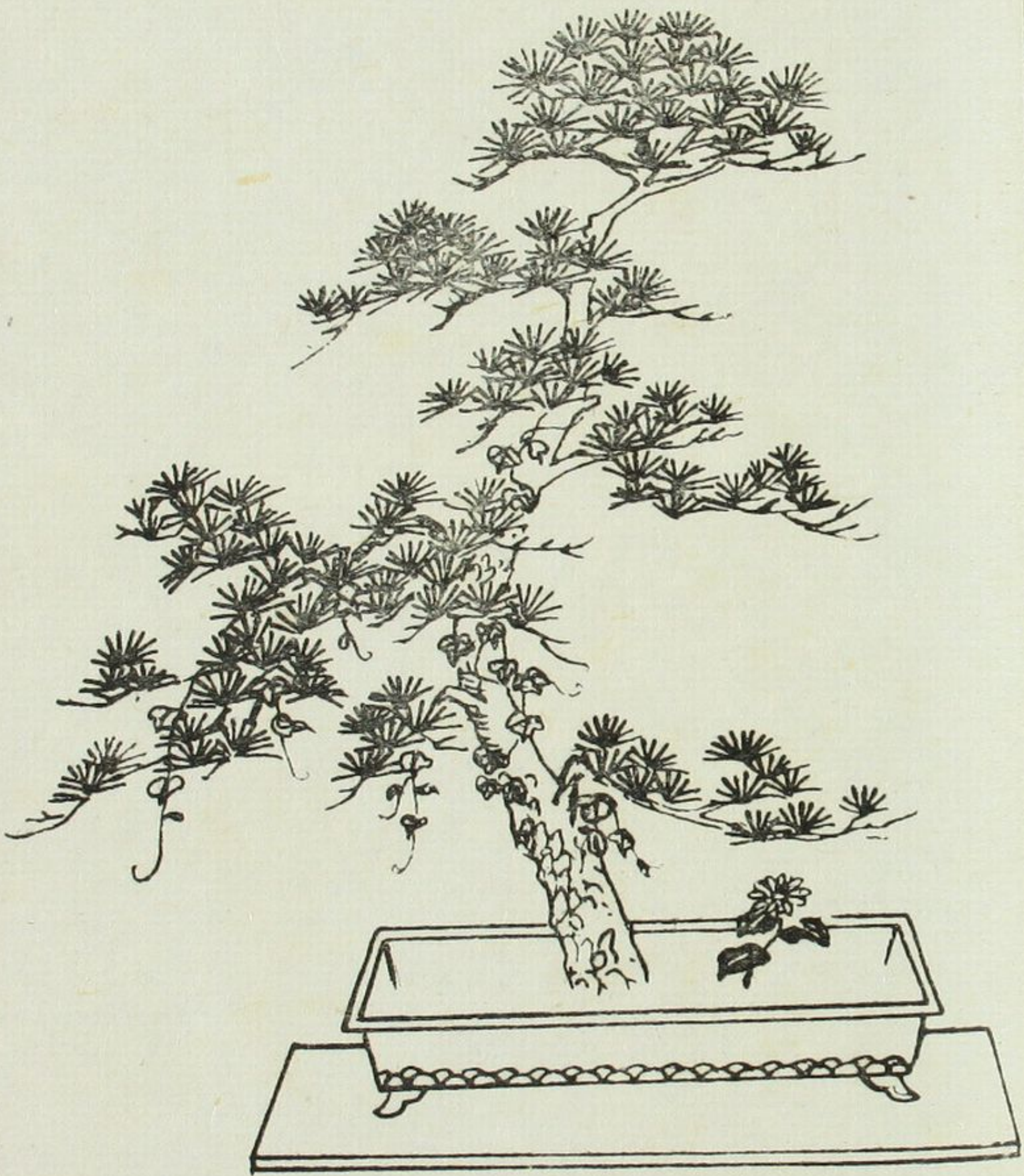
須磨の浦人鹽たるころ

とおくれり。

花 説

頃	花	花	生
秋	器	材	方
鉢	砂	松	
	鉢	蔦	
		中	
		白	
		菊	

老松のいざりたるがよろし、蔦は松の二の枝迄這はして、松の小枝より垂らして風情を取
るべし、花器は須磨の海岸の縁による歌意を取りたるものにして、松島の松に浦人鹽たる
、より蔦を垂らし、源氏の君の嘆ける体なり。又蔦は傳ふなり、尼宮に消息を傳ふるの意
なり、白菊は月と見立て株を分け、遙かに奥へ海面にうつりたる様に用ふ。



一三、明石

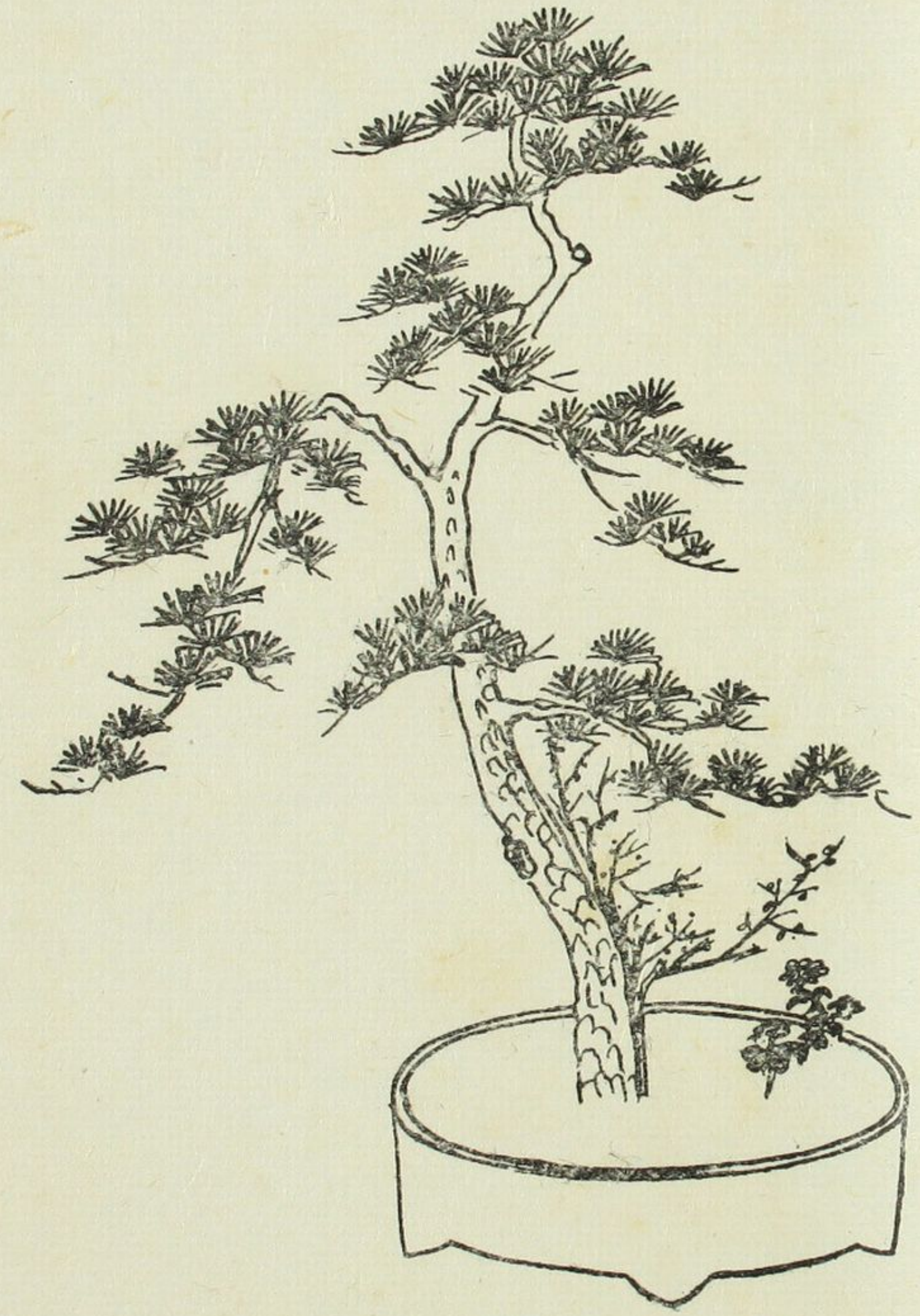
秋來りて一層の淋しさを覺ゆ、其年も過ぎて翌年三月の朔日より暴風雨となり、而も雷さへ加りて上下神明の戒ならんと云へり、紫の君の手紙には淺間しい長雨で外に出る事もならず、政事向もおこたりがちなりとあり。源氏の君は一心に住吉神宮に立願し居りたるに、天氣益々荒れ終に落雷して廊下は火災にかゝれり、漸くにして風も止み雨も小降りとなりて、外の景色を眺め居たるにうとくと眠りに落ちたり、忽然として父陛下お姿を現し給ひ、住吉神の案内に従ひ、早く此の浦を去るべしとの靈告ありて目も覺め、間もなく夜も明けたり、不思議にも渚に小舟を寄せて二三人許り館をさして來る。何人ならむかと問へば、前の播磨守入道なり、入道は去る朔日の日に異体なる者、夢に告げ知らず事あり、十三日には顯著なる驗見せん舟を装ひ置け、雨風止まば此の浦に寄せよと示された。實に神の導きならんと云ふ、源氏の君は夜の明け果てぬ間に親しき者四五人と舟に乗れば、風出でて飛ぶ如く明石に着きぬ、入道の家は廣大なる建物にして、濱邊の家は全部源氏の君の住居に充てたり。久しく手も觸れざる琴を取り出して、はかなく搔き鳴らし、廣陵と云ふ手をあらん限り弾きすましたるに、松の響波の音に合ひて若き人共の身に泌みて身をかこちけり。夜は更けて入道は身の上話を始めたり、ついに娘明石をそれとなく源氏の君にほめかしかければ、なつかしくも

思われしが罪人の口より所望する事もはばかり居たりしと互ひに語り合ひ、戀しく思ひ居たり
 源氏の君より
 旅衣うら悲しさに明かしかね
 草の枕にゆめも結ばず
 とおくれり。

花 説

頃 花 生
 器 材 方
 秋 廣 口
 松、梅もどき、鹽風菊

松のいざりたるものよろし、梅もどき前に出す氣味に松のかげと云ふ心持に生け、鹽風菊は海岸に吹き寄する鹽風故、奥に一かたまりに生け、海の意なり。
 源氏の搔き鳴らしたる琴の音にして、松の響(松)波の音(鹽風菊)にこもり合ひて、心ある若き人即ち妻となる明石の君(梅もどき)の身に泌みたる所なり。
 花器は源氏の起臥せる入道の海の方の家は廣大なれば、此縁に依り廣口物を用ゆるなり。



一四、滯

標

都にても帝が眼病に罹られ、三月三十日には大雨落雷などあり、其夜帝は故上皇の夢を御覽になりしかば、母后のお諫めも顧みず、御英断を以て源氏の君の恩赦を宣旨給ふ、明石の君には既に妊娠中にして、いたく源氏の君と別れを悲しみしかば、近く京に引取ることを誓ひ、又一絃琴を與て歸京せり。

源氏の君は從二位右大將に復し、又新に權大納言に任ぜられ、昔にかはらず多くの人々から尊敬を受けたるが、翌年二月、陛下は突然御讓位ありて冷泉院（藤壺の女御の御子）御即位し給ひ承香殿の女御の御腹なる三歳の御子春宮に立たせられ、葵の君の父左大臣攝政大政大臣となり、其三月明石の君は玉の如き女兒を分娩したるにぞ、源氏の君は乳母を選びて明石に下し、内祝には數多の祝物など送たりたり。

秋となりて源氏の君は須磨における立願を解くために住吉詣を思ひ立ちぬ、偶然明石の君も參詣を思ひ立ちて住吉に着船せり岸邊に着きて見れば源氏の君の御出でましの立派なるに引換

へ我身のみすほらしきに引け目を感じ難波に船をこぎ戻せり。源氏の君は参詣を終りて歸らんとするとき惟光明石の君のことを告げければ、翌日難波に立ち寄りて

露標戀ふるしるしにこゝまでも

めぐり逢ひける縁にしふかしな

花 説

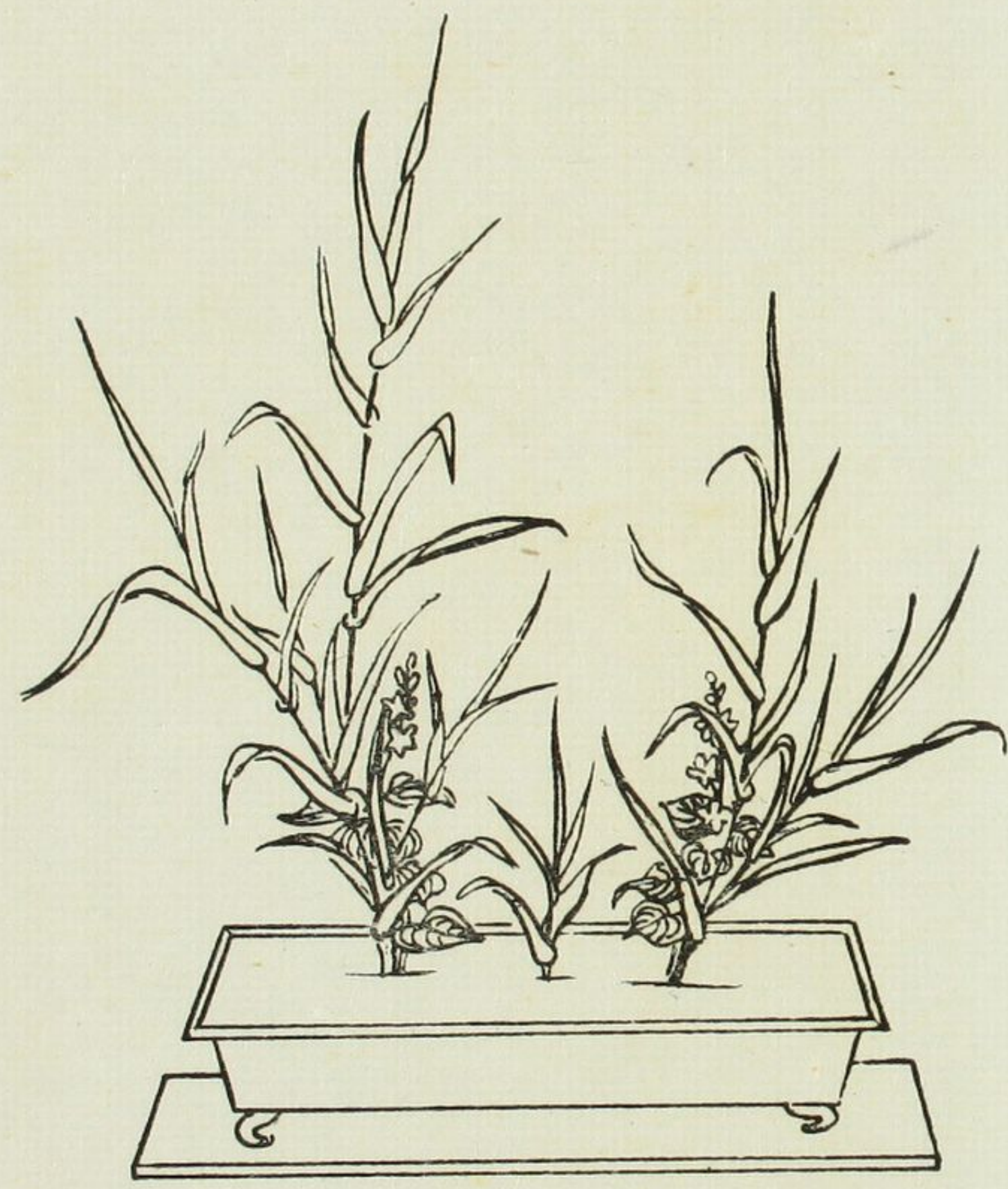
頃 夏 鉢
花 器 砂
花 材 芦、水葵(なぎ)
生 方

芦二三本宛水際ばら／＼に三株生け芦の間の根元々々に水葵を生くべし、水葵は根元見へぬやう芦の裏手より生る様に心得べし。

芦は水の深き処の意、標は標識の意にて杭を云ふ。

芦は露標なり三株に生けるは明石の君乳母、女兒の三人の意、水葵は舟と見立てる故根元見えず共不苦

(註) 明石の君外二人が船にて難波に漕ぎ行く休なり。花器の砂鉢は海即ち住吉の浦より難波の浦の岸の意なり。



一五、蓬 生

未摘花は源氏の君須磨に下りて以來、其の庇護頼に絶えて倍舊の貧窮におちいり、今尙奉仕するものは故宮在世の時よりの老女ばかりなり、家は軒の落ちる程に荒れたり、源氏の君は歸京の後花散里を訪ふ夕月夜昔の事を思ひ出し、故常陸宮の家を訪ふ。

惟光草の露を拂ひて道を拵へければ

尋ねても我こそ訪はめ道もなく

ふかき蓬のものとこのころを

(註)かゝる處に住みつるも變らぬ心の清きをもつて、尋ね慰めんと意なり
間も無く未摘花は二條院の東院に引取られ、源氏の君の世話を受くることゝなれり。

花 説

頃 夏 籠
 花 器 掛
 花 材 蓬 姫 百合
 生 方

序半月にかざし蓬裏葉を見る様に百合水際別れてきれいに副ふべし、株分の心也。

蓬生とは蓬の繁りたる地をいひ、草深き地と云ふに同じ。

蓬はほうくと軒を生ひ上ると云へるより蓬を以て末摘花の家と看做し、其の内に小百合
 即ち末摘花住居するの体となす、株分の心は即ち末摘花恥しき様なり。



一六、關屋

空蟬の君の夫伊豫介は常陸の介となりて、空蟬の君と共に住國に下りしが、其處にて源氏の君が須磨に至れるを聞き、人知れず熱涙を感じ居たり。

世運一轉源氏の君は早くも歸洛し、常陸介は其の翌年の秋、漸く任期満ち上洛の途に就き、今日逢坂の關を越えんとするに、恰も此の日源氏の君は近江の石山寺に詣でんと數多の供人を引き具して至る、常陸介は琵琶湖の傍らにて此の事を聞き、道の騒がしくならぬ間に打越さんものと急ぎけるに打出の濱に差かゝりたるに、源氏の君は既に栗田口山に來れるを聞きて馬より下り、此處彼處の杉の下に女達の車とも掻き下し木隠れに居畏りたり、時は九月の晦なれば紅葉の色々こきまぜ、霜枯の草むらゝおかしう見え渡るに、關屋より颯と外れ出てたる旅姿の供の色々の襖の付した縫物括染の様も然る方々をかしう見ゆ。

源氏の君は今右衛門の佐になれる小君を呼びて、文を送りしに空蟬は

逢坂の關や如何なるせきなれば

繁き歎きの中を分くらん

と返歌あり。

(註) 毎時も斯くまゝならず、せかるゝなりしけきなけきに、杉の繁りたるに掛けたるなり

常陸介は病死し空蟬の君は尼となりたり。

花 説

頃 花 花 生

器 材 方

秋 馬 木

盥 賊

小 菊

木賊を株分けに生け、小株の方の内手に小菊少々見えかくれにあしろう也、根元不見共不
苦

(註) 花器は常陸介が乗りし馬の縁に依るなり、木賊は戸草に通ず故に逢坂の関の意。
小菊は空蟬の杉林に隠れ居る様なり。



一七、繪合

六條の君は前齊宮と共に伊勢より歸京し、源氏の君とは手紙の往復くらひはいたし來りしが重病にかゝりて尼となり、しばしば慰めたるに案外の重態にして、齊宮の一身を遺囑して果敢なく此の世を去れり。

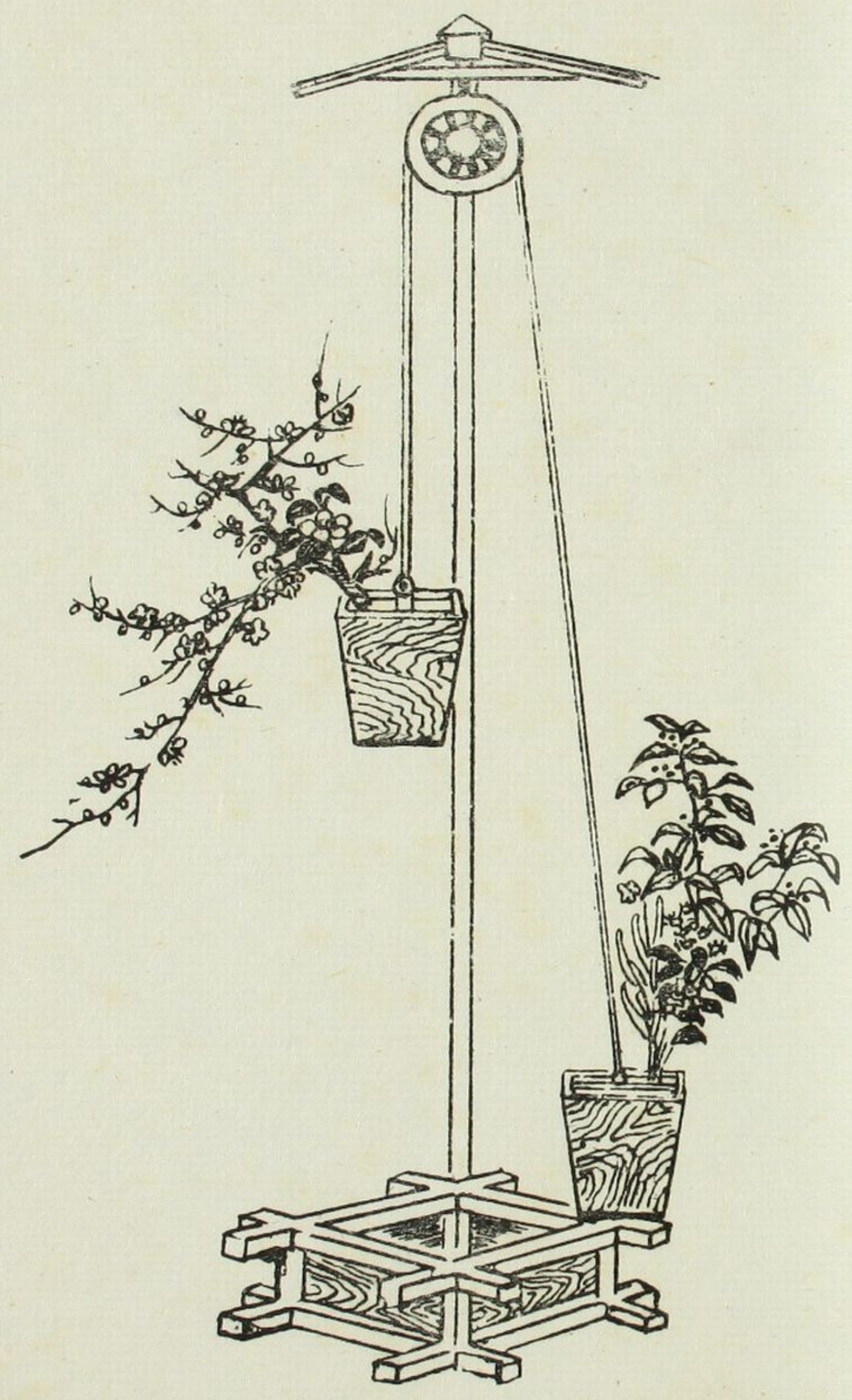
院の陛下は齊宮にお心あり、二十二才の春入内せらるゝことに決定し、入内の當日には源氏の君より衣類櫛香の箱其他種々の物を贈り賜へり、女御は目出度入内ありて梅壺殿に住せり。陛下は繪畫に興味を持たせられ、梅壺の女御も亦繪を好み、堪能なりしより陛下のお心に泌みて自然と梅壺御殿に足繁くなることを聞きたる權中納言（頭中將）は、弘毅殿の女御に諸名家に描かせたる繪を差上げ置きたり、陛下は珍らしきこと、思召しめされ、清涼殿に持歸り給ひて緩くりと御覽にならんとせしを、梅壺の女御の見んことを警戒して、之を拒みたるを聞きし源氏の君は大に立腹し、己の所持せる古き繪や自分の描きたる畫帳を梅壺の女御に贈りたれば、一方權中納言は厄鬼となりて、繪畫を集蒐し初めたり、頃は三月の初め双方所持の繪畫を持ち出し、其の優劣を決つせり、判者は帝の御兄太宰師の宮にて、最後に源氏の君の自筆の須磨の繪卷を取り出したるに殊の外勝れたるものにて、弘毅殿の繪畫之に及ばずして、遂に梅壺の方の勝利となれり。

身こそかくしめの外なれそのかみの
心のうちをわすれしもせず

花 説

頃花花生
春 對 器 材 方
瓶 釣 梅 上、
下、仙 水 寒
蓼 仙 菊

上瓶の梅に落枝をつかひ椿を把る心組にて随分縁を取る事が肝要なり、椿は津葉木の義にして光澤艶麗なるを云ふ。
梅は梅壺の女御にして女御が美しき須磨の巻を持てる所なり。
下瓶は弘毅殿の女御が、各種の繪畫を列べたる所なり。
釣瓶をつることは相競ふと云ふ意にして、梅壺の方が勝となりたるに依り上瓶とす。



一八、松 風

二條院の傍に東の院落成せしかば、源氏の君は、明石の君に入京を促せるが、思慮深き明石の君は田舎より京に上りて、人々の物笑ひとならん事を恐れてためらひ居たり、父入道は妻の尼と共に謀りて嵯峨野の大井川のとりに、荒れたる別荘あるを思ひ出し、此旨を源氏の君に通知しければ、君は直に惟光をして見分けせしめたるに、其のあたり面白く川に通ひたる所は恰も明石の家より海を眺むる心地すと云へり、別荘の修理終りければ、母尼君明石の君等は父入道を残して海路を辿りければ、思ふ方の追手の風にて、限りける日を違へず京に入りぬ、日數経れば物思ひつゞけられて、明石の家居も戀しく徒然なれば、彼の形見の琴を少しく掻き鳴らすに、松風端なく響き合ひたり。

變らじと契りしことを頼みにて

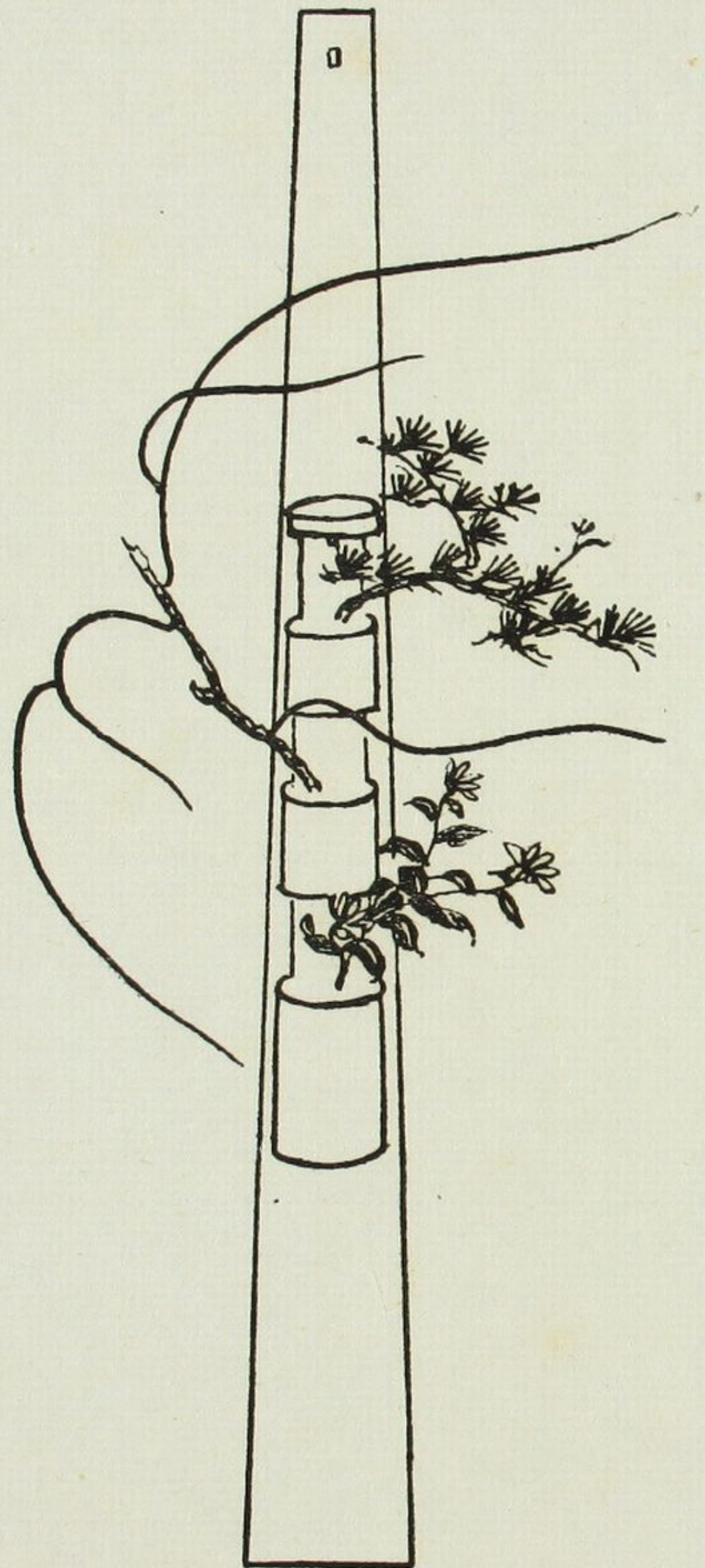
松の響きに音をそへしや

花 説

頃 器 掛 秋
 花 材 三 重 切 り
 生 方 松、柳、菊

初重 松は風体 二重 柳は風の吹きたる様に二重より松の上にかける
 三重 菊

松は松風の松なり、柳は風見草と云ひ、風と見立て五筋生るなり、是を五風と云ふ、明石の君
 大井川の傍の別荘に來り、徒然のあまり形見の琴を取り出し掻き鳴らせる所にして、松風と和
 し柳は大井川の縁に由り遣ふ、菊は明石の君なり。



一九、薄

雲

故葵の君の父君なる時の太政大臣薨去せられたり、國母たる薄雲女院（元藤壺女御）は豫ねて御病氣なりしが、三月に至り俄に御容態革まり、陛下も非常に叡慮を惱まし給ふ女院は御歳三十七なるも、若々しき御姿にて唯陛下が源氏の君の御子なることを夢にも御知らせ申さずして、死する事を残念に思召されて、祈禱なども有らん限りに手をつくされたるも、何の効顯もなく灯の消ゆる様に往生遊ばさる、源氏の君の悲しみは又一層にして、二條院の櫻を見ては女院全盛時代にありし花の宴を思ひ出し、人目に觸るゝを憚るやうに念誦堂に籠り居て一日泣き暮せり、夕陽華やかにさして山際の梢に雲の薄く鈍色にたなびき、物哀れなるを見て

入日さす峯にたなひく薄雲は

物思ふ袖に色やまかへる

御佛事なども過ぎて事ども鎮まり、陛下も心細く思し召されたり。

藤壺の女院の御世よりの御祈禱僧あり。或日僧は陛下が源氏の君の御實子である事を申上げた

り、帝は痛く驚かせ給ひ今迄源氏を臣下として取扱ひし事を歎かせられ、待遇を改め給ひ太政大臣に任ぜんとなし給ひしも源氏の君は之を固辭したり。

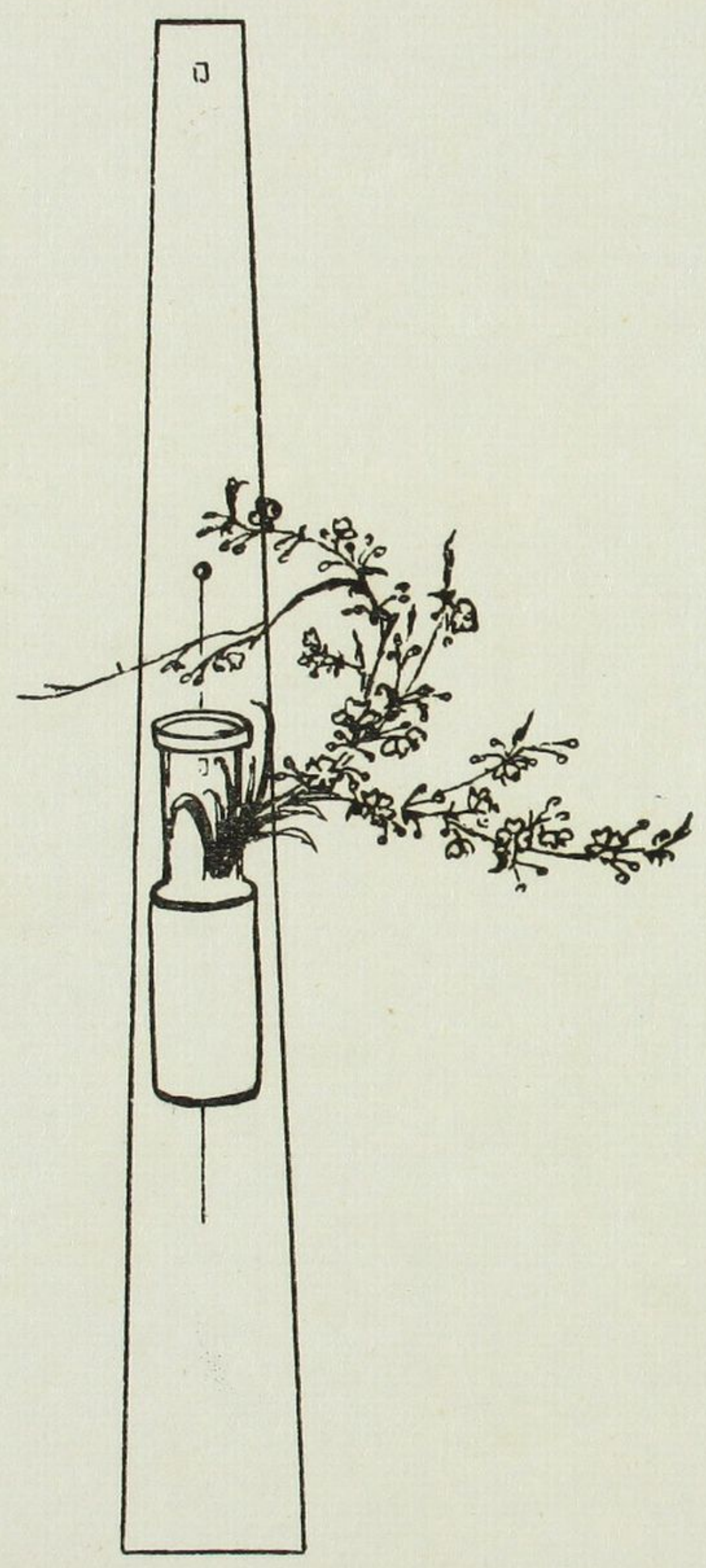
花 説

頃 春
 花 器 掛一重切
 花 材 彼岸櫻、著我
 生 方

櫻薄雲の如く生け、著我は前に副ふ。

(註) 著我を前副とするは櫻を雲と見るが故に、雲脚を隠す心得なり。

櫻は一名おもひ草の異名あれば、情人の意よりも用ひしならむか。



二〇、 權 (朝顔)

時の齊院朝顔の君は父式部卿の宮の喪によりて齊院を辭せり、源氏の君より毎日の如く手紙を送りたるも、朝顔の君は前の如く戀を訴へらるゝ導火線たらん事を恐れて返事も出さず、九月に入りて桃園の宮に歸られたり、源氏の君は桃園に權を訪れ、戀をせまりしが應ぜず、心ならずも二條院に歸りたるも、味氣なさに眠られずして朝早く戸をあけさせ、霧降る庭を眺むれば、枯れたる花どもの内に朝顔の此處、彼處と這ひ廻りて、有るかなきかに咲き残れるを手折りて

見し折の露忘れぬ朝顔の

花のさかりは過ぎやしぬらん

(註) 早く見なければ機を失はんとの意也

源氏の君は朝顔の君の心を動かさむと苦心せしも、遂に其甲斐なかりき。



花 說

頃 花 花 生
 秋 重 器 材 方
 瓶 釣 重 朝
 瓶 瓶 瓶 瓶

別に傳なし

(註) 源氏の君より朝顔の君に贈りたる朝顔也。萬葉集に曰く朝顔はつるからくれの云々より、朝起きの顔を洗ふの意味に依りて、花器に釣瓶を用ふるなり。

一一、乙 女

葵の君の忘れ形見にして、三條の宮なる祖母大宮の手に育てられたる夕霧の君は、今年十二になりければ、元服せしむるに當り、源氏の君は思ふ仔細ありて、四位にもと思ひしを淺黄の定袍を着る六位に讀ひなすと共に、大學に入らしめたり。

雲井の雁の君と云ふは内大臣（元頭中將）と某女王との間に生れ、（祖母大宮）に預けられて、夕霧と雲井の雁とは同じ祖母の手に育ち、双方とも十才を越す頃、内大臣は同室することを禁じたるも、幼同志は早くも戀心を覺へ居たり。この事を知りたる内大臣は、雲井の雁の君を連れ歸ると云ひければ、夕霧の君は一方ならず悲しめり。

源氏の君は今年の新嘗會の五節の舞姫に攝津の守惟光の女を選び、自宅に於て能く習はせ其の前日の夕方二條院に連れ來れり、夕霧の君は舞姫を見んものと舞姫の假部屋に、恰も雲井の雁と同じ年頃にして、戀人に似たる姫あり、ひそかに立よりて心を通わせる内、世話役の女共來りければ心残して出で行けり。

源氏の君は陛下の御前にて舞ふ舞姫を見て、その昔想ひを寄せたる大貳の姫の姿を想ひ出しその夕方

少女子も神さびぬらし天津袖
ふるき世の友よはひへぬれば

と大貳の君に歌を送れり。
 (註) 御身のふるき友なるわれも、今は年老ひければ御身も年長け神さびたらんの意。
 大貳の君より

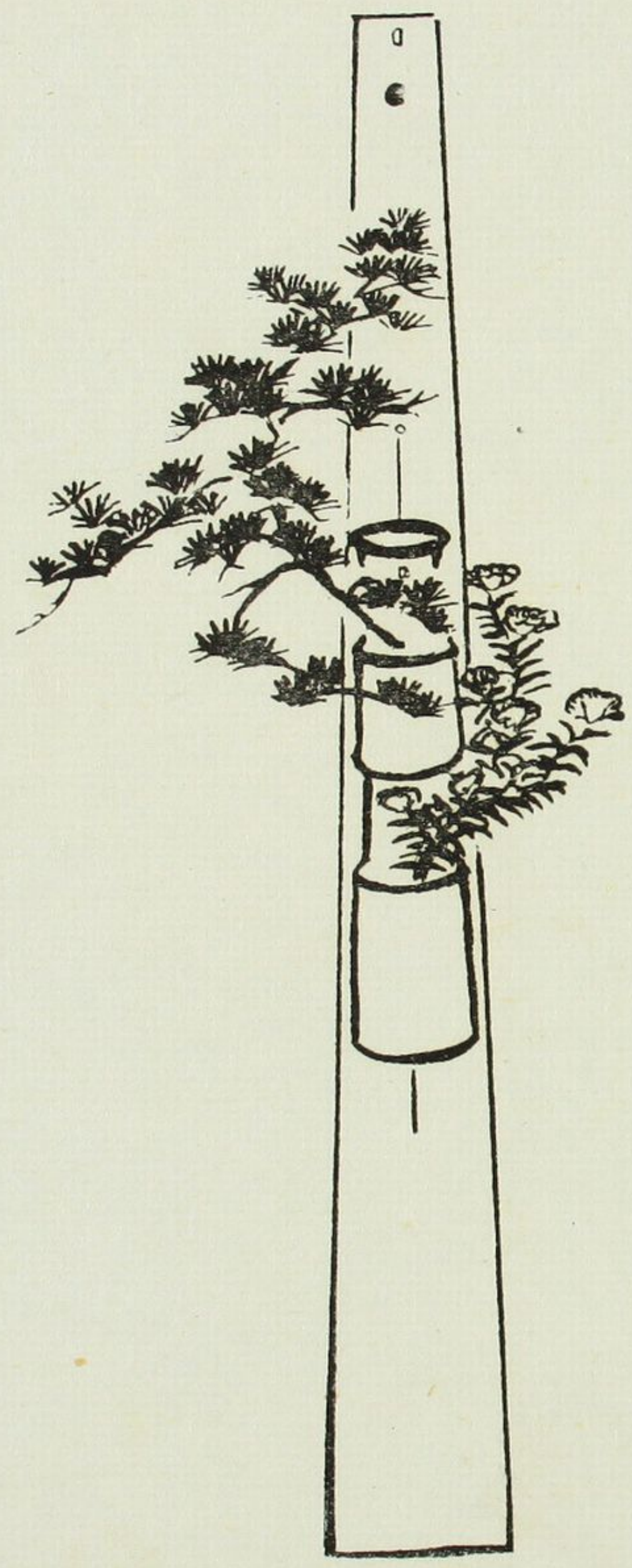
かけて言へば今日の事を思ほゆる
 日かけの霜の袖にとけしも

花 説

頃 夏 掛 二重切
 器 松、羽衣草(鋸草)
 材
 方
 花 生

老松の葉作り一手前にのぞきたる体よろし、羽衣草は二重目より松に羽衣の掛りたる体
 作意すべし。

(註) 老松の葉作りの宜敷は神さびたる体なり、羽衣草は大貳の五節の君にして、松に
 かゝりたる作意は返歌のかけて言へばの意なり。



一一一、玉

鬘

母夕顔の君に死に別れた玉鬘は、四歳の時乳母の夫婦に伴はれて、筑紫に下り此地で養育され十歳のころ乳母の夫は急病で死せり、急に京へは歸れぬ事情ありて、心細き月日を送る内、玉鬘は二十歳を迎へり。容姿美しきを聞き言ひ寄る者多き内に、肥後の國の豪族大夫の監と云ふ者深く思ひをよせ、威勢を以て迫るを、兎角にまぎらしつゝ、早船を仕立て、乳母の子豊後之介は或る夜逃げ出て京につき九條に宿りたり、或る日長谷に參詣の折偶然にも玉鬘の行方を捜しもとめて、祈願に來たる右近と椿市の宿にて邂逅せり、皆々驚き且つ悦び源氏の君に此の由告げたり。源氏の君は玉鬘を六條院に引取りて花散里に託し、硯を引き寄せ手習に

戀はたる身は夫れなれど玉鬘

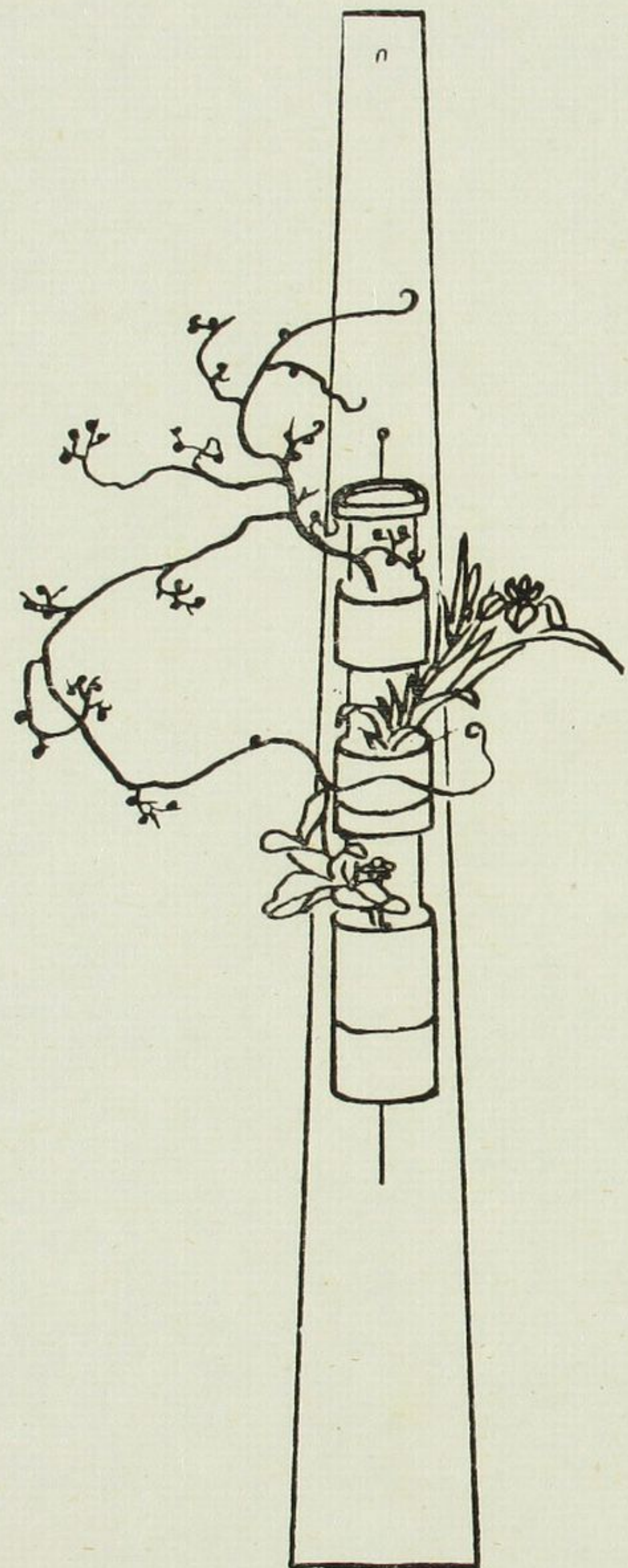
如何なる筋を尋ね來つらむ

(註) 此玉鬘は草鬘にて、這ひ廣がれるは、筋を尋ねて本に到るに譬へたり。

花 説

生	花	花	頃
方	材	器	
		上	秋
		重	三
		蔓	重
		物	切
		二	
		重	
		三	
		重	
		水	
		草	

初重は蔓物を破の手流しに生け、二重と三重との間を切り、二、三重へ水草を生くる也
 (註) 玉鬘の君筑紫より上り来る所にして、水草は水即ち舟路なり、破の手流しは歌意
 の如く、如何なる筋を尋ね來つらんの意也。



一三三、初

音

年立ち返る朝の宮の景色は數ならぬ垣根の内さえ長閑にて、六條院の美しさ云わん方なし、
今年の元旦は子の日也、此處の女や女童らは庭の小山に立ち出で、小松曳をして興じ居たり、
明石の君より美しき籠に菓子や料理など入れて贈らる、五葉の松に鶯をとまらせた造物に

年月を松に引かれてふる人に

今日鶯の初音きかせよ

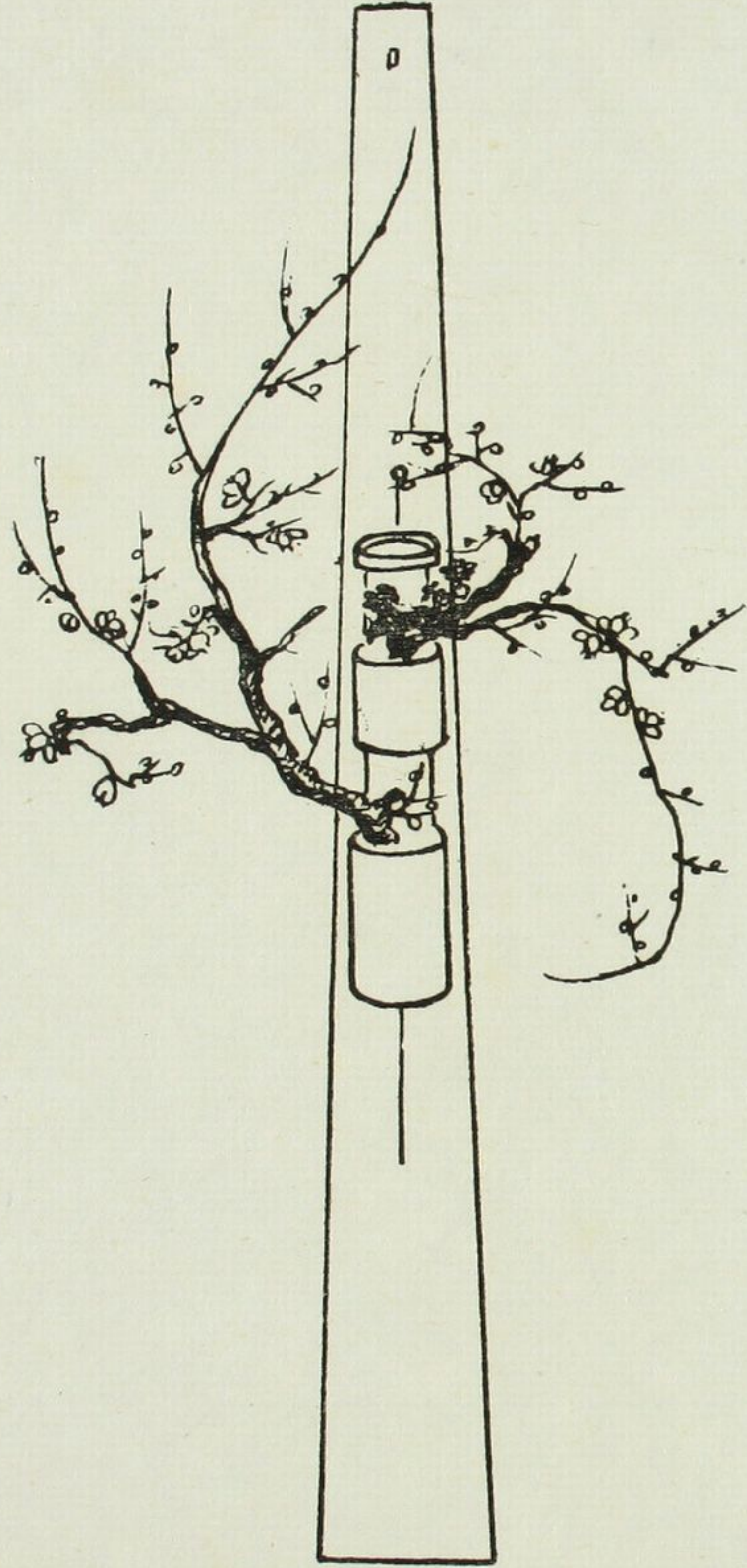
とありしを源氏の君は明石の上が、小供を思つて居る心根を哀れに思ひ、たとえ拙くとも遠慮
すべき方にあらざればとて、この返事を姫君に書かせたり。

花 說

頃 春
 花 器 掛 二 重
 花 材 梅 寒 菊
 生 方

梅を二重序に生け、寒菊を以て鶯の宿まりたる様に初重の根元に生くべし。

(註) 初子を初音に通はせて梅を生け、寒菊の鶯、根元より梢に上り(明石の子が鶯の子となれる意)なる体にして、初重の落枝は鶯の木傳ひて古巢を訪ふの意なり。



二四、胡

蝶

紫の君の庭前の春景色は、花の色鳥の聲も外の里より珍らしき、唐風の舟を造りて、庭中の池に卸させ、中宮（六條の女）の女房達をのせて、遠近の櫻、藤、山吹などの今を盛りと咲き匂へる中を漕ぎ廻り、夜に入りてはかがり火を点して、御階の下の苔の上に樂人を召して、彈きもの吹きものとりぐに夜遊び明かしたり、今日は中宮の御讀經の始なれば、正装に替へて晝過ぎより皆々其の方に行けり、紫の君の志にて佛に花を奉るに、鳥蝶に裝束したる童は人容など殊に整へさせ、鳥には銀の花瓶に櫻を挿し、蝶は黄金の瓶に山吹きを嚴めしく南の山際より漕ぎ出づる程風吹きて、瓶の櫻少し打散り霞の間より立ち出でたる様いと哀に艶きて見ゆ、童部御階の下に寄りて花を中宮に奉れり、そして中宮より紫の君に

胡蝶にも誘はれなまし心ありて

八重山吹をへだてざりせば

（註）心ありてへたてずは胡蝶に誘はれて、なりとも來りたしとの意なり。

八重山吹は重なる山の心なり。

花 説

生	花	花	頃
方	材	器	夏
		掛	籠
		れたま、	なでしこ

れたまは常の如く生け、撫子の一、二輪、思ひ掛けなき處につかひ蝶と見る也

(註) 歌の花園の胡蝶、胡蝶にもさそはれなまじとあるより、くさむらに胡蝶の飛びかふ如く生くる也。



二五、螢

玉鬘の君は益々艶となり、源氏の君は表面は親らしく振舞へ共内心思をいだし、暇あれば玉鬘の部屋へ行き、僅にその顔を見て苦しき心を慰め居たり、偶々兵部卿の宮とて思を懸けらるゝ方あり、源氏の君は玉鬘の君の返事を宰相の君に書せたり、玉鬘は源氏の君の道ならぬ戀をさへざる爲、わざと兵部卿の手紙を熱心に讀む様になしたり、兵部卿は返事受けし夕方御殿へおとづれ、妻戸の傍に座し玉鬘は几帳を隔てて奥く深く座せり、源氏の君の進めにより玉鬘は几帳近くによりし時、几帳一ひらすらりと上るや、目の前にほつと明るい光さしたり、玉鬘は扇で顔をおほへり、兵部卿はその姿が實に艶だと感じられたり、その光は螢の光であつて、源氏の君のかねてよりのたくらみなり、源氏の君は直ちに座を外せり、卿は歌にこと寄せ情火の仲々に消へざるを訴へ玉鬘は其返歌に

聲はせて身をのみこがす螢こそ

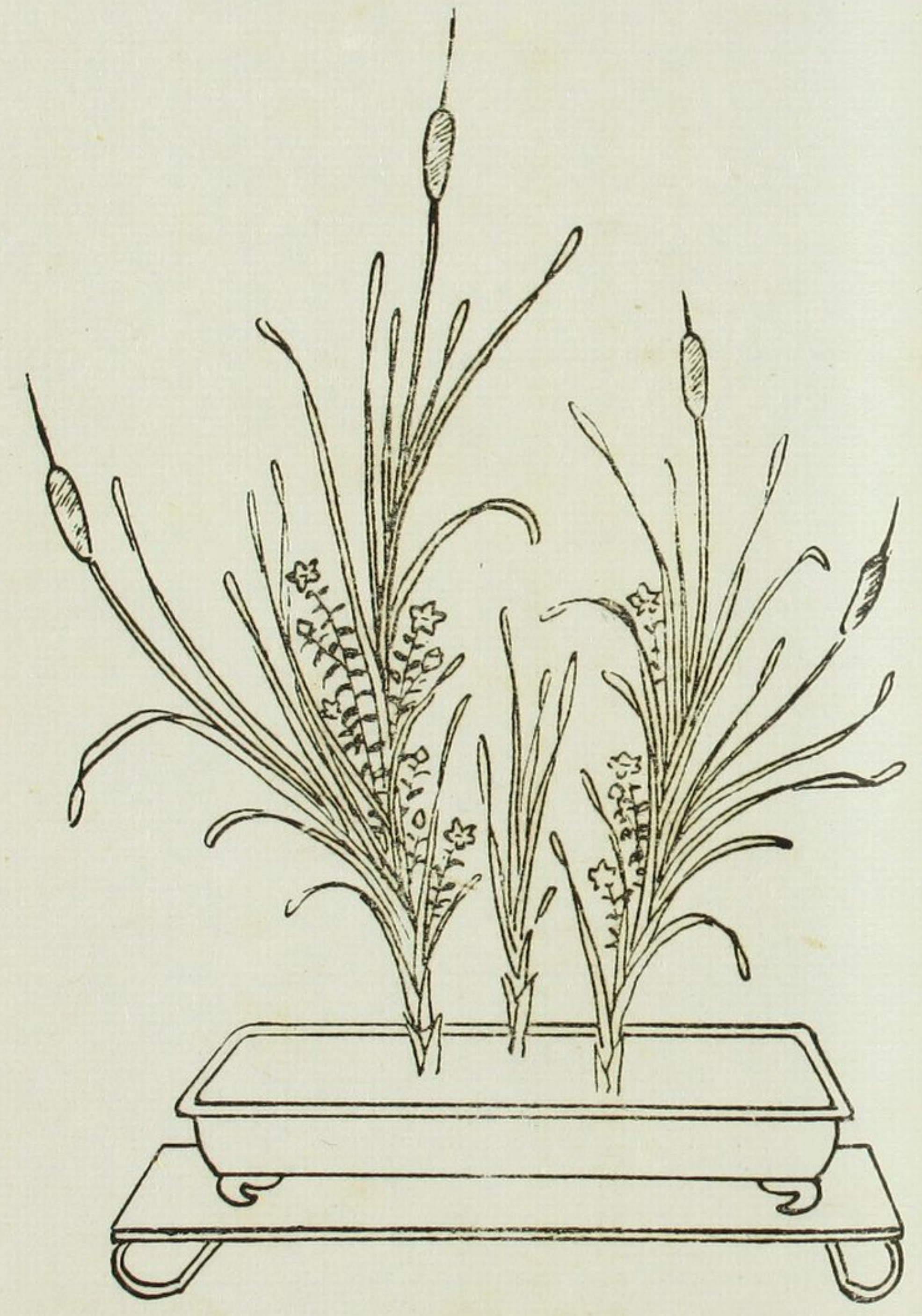
云ふよりまさる思ひなるらめ

と云わぬは言ふに勝る思ひをこめたり。

花 説

頃	夏
花	廣口
花	がま(又は菖蒲)
器	澤桔梗
材	
生	方

透標と同様也、がまを所々に生け、桔梗を間、間に生けて瑩とみるべし、がま三株に生けるは宮と玉鬘との話を宰相の取次の處にて、瑩と見る桔梗を間に生くるは源氏の君の放ちたる意なり、花器は御殿の廣き縁に由り廣口を用ふ也。



二六、常

夏

夏の暑き日に源氏の君は東の釣殿に涼みゐたり、時々夕霧の中將や内大臣（頭中將）の息も訪ね來りて、共に鮎を着に酒を出し水飯を共にし、種々物語をなしたる後、源氏の君は此處を出で、玉鬘の君の方に至り縁側近くに伴れ出し、御簾越に色々話の末、夕霧と雲井の雁との關係を語り、内大臣のあきたらぬ所致を不平らしく言ひしかば、玉鬘の君は實父内大臣と源氏の君との間には斯様の隔のありつるかを知り、それと同時に父戀しの念わき出でたり、源氏の君はあなたのお母様（夕顔）が内大臣へ、撫子の花を贈り「この花の様なるを（玉鬘のこと）忘れないで下さい」とつけた話を内大臣がわたしに話したのは今のことのやうに覺ゆとて

なでしこの床なつかしき色を見ば

元の垣根を人やたづねむ

（註）元の垣根は夕顔のこと、玉かづらを内大臣に見せなば、元の垣根を怪みて煩しかるべしとの意。

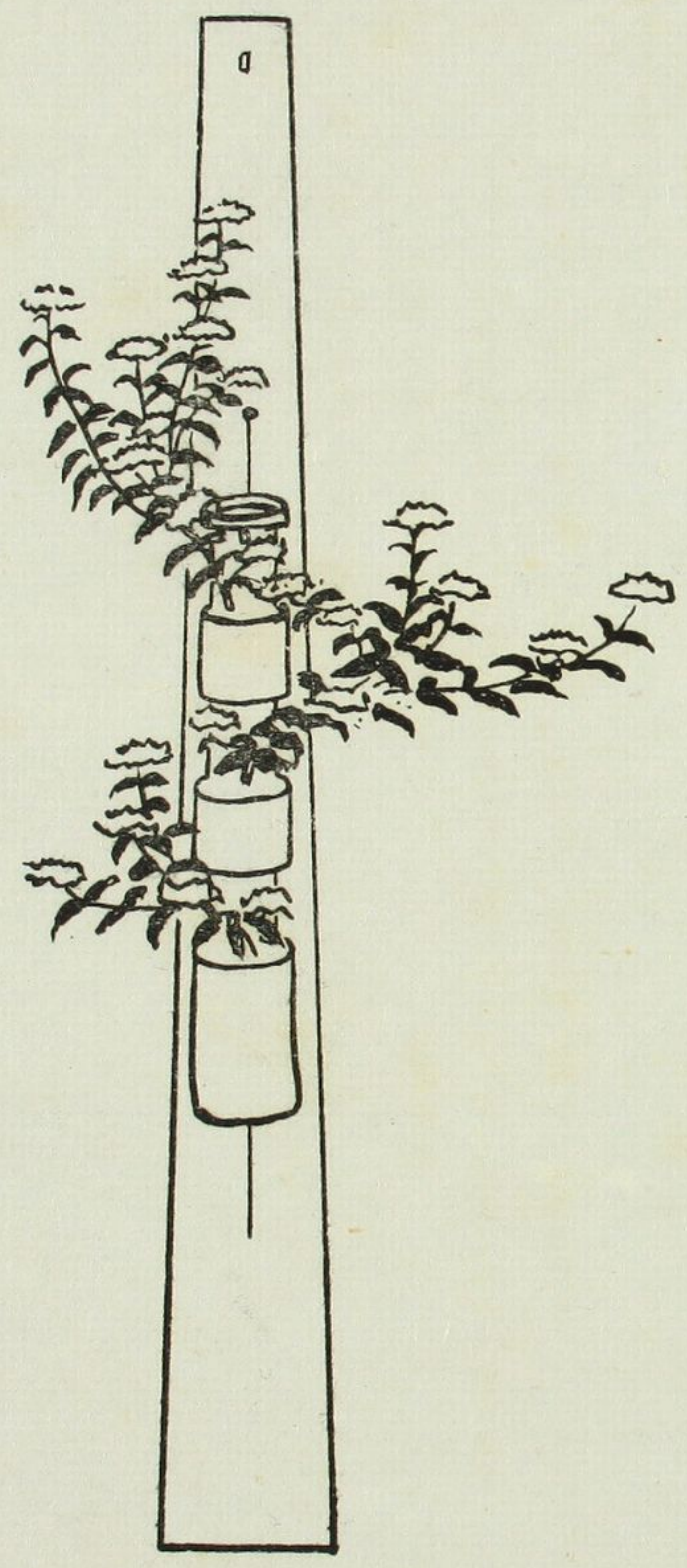
花 説

頃 夏
器 三重切り
材 撫子一式
方

初重、三重、同色、二重白

初重 玉鬘、二重白は源氏、三重内大臣なり。

玉鬘と實父内大臣とは近くにありて早く對面なしたしと思ひしが、源氏は元の垣根を怪ま
るゝを煩はしと思ふ意にして、二重目の花材にて初重の根元をかくす事手なり。



二七、 篝 火

聽て秋は來りぬ、源氏の君は一人繁く玉鬘の君を訪ふ、初風涼しく吹いて五日許りの月は少し雲に隠れたり、諸共に琴を枕に添ひ臥したり、斯く迄に戀しき人に接近しながら、此上自分の力にて如何ともなし難きを打歎きつつ夜を更し、月無き夏の庭に光無きは趣の無きものとて供人に命じて篝火を燃へ立たせ、源氏は即ち

篝火に立添ふ戀の烟こそ

世には絶せぬ炎なりけれ

と篝火にこと寄せ、自分の戀の炎は永久むねに消へざると諷したり。

花 説

頃 花 花 生
 秋 馬 器 材 方
 盃 仙 翁 花

芦を株分けに生け、仙翁花は中間に生け、花の飛びかふ様生べし。

(註) 男株は源氏、女株は玉鬘、兩人琴を枕にし、源氏の胸中恋の炎のもゆる處なり。

芦は水の上の篝火のゆかりに用ひ、仙翁花を篝火と見るなり。



二八、野分

初秋の野分の風物狂はしう吹き荒び、さても美しく咲き誇りし秋草も、今は跡かたもなく散りはてたれば、秋好中宮はお心を掻き乱さるゝ様に思召し給ふ。源氏の君は夕霧の君を遣して方々を見舞はせ、又自らも中宮明石の君を見舞ひ、臆て玉鬘の君の方に至る、昨日は風に物怖ろしうて夜もすがら寝むらず、今朝は常よりも遅れて恰も源氏の君の至りし時鏡を見至り、夕霧の君はそつと覗き見居るに玉鬘の君が身体を後に引いて居るを、手を伸して自分の傍に引き寄するはずみに髪がばら／＼と着物の上に亂れて、女は困つた表情をして又柔和の態度で、源氏の君の膝に寄りかゝれる様は、今を盛りの八重山吹の咲き亂れたる花が露を帯びたる夕方の風情なり、女達は誰一人出で来るものもなし、いと細やかに打囁き語らひ聞ゆ

吹き亂る風の氣色に女郎花

しをれしぬべき心地こそすれ

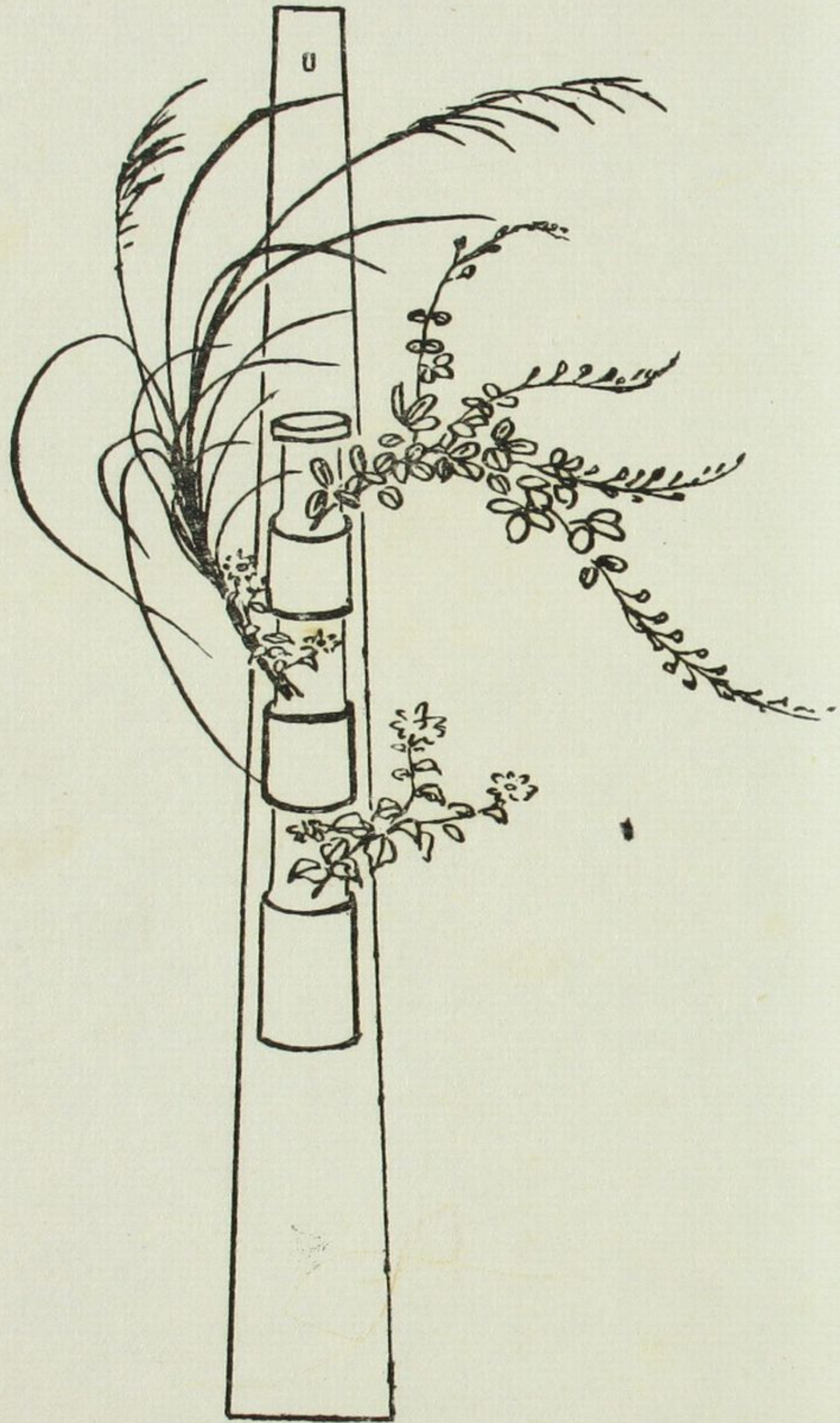
源氏の心かけらるゝ己には、萎るゝ様に思はると源氏を風に己を女郎花にたとへたる也

花 説

頃	花	花	生
秋	器	材	方
掛 三 重 切	薄 多 萩 少 々	野 菊	

一、二重に薄萩を生け、二重の根元と三重に野菊を生くべし。

(註) 風の体にて菊を風下に副ふ心得あるべし、野菊は残菊の趣を以て生べし、二重序に限らず萩と薄にて荒くあたりし野分の風をあらはし、菊を紫の上と玉鬘とに見るべし



二九、行

幸

十二月に大原野に行幸あり、世を挙げて残る人なく打ち騒ぐを、六條院よりも見物車幾台も出たり、陛下の御出門は卯の時にして、朱雀大路を五條より西に折れ曲り給ふ、桂川の許まで物見車の隙なし、御幸と云へども此程の盛儀は前代にもなかるべし、親王達も大官達も陪從せり玉鬘の君も拜謁に出でたり、我父大臣を人目を忍びてよく見れば、立派な男盛りの人と見へたり、然し尙陛下は一段と貴高かきところあり、源氏の君が度々宮つかへを勸むるを思ひ出し陛下に奉仕することを考へるに至れり。

其の翌日源氏の君は「陛下をよく拜みしや宮仕へは悪しくないと思ふたでせう」と書いて送りければ玉鬘の君は

打ちきらし朝曇りせし行幸には

さやかに空の光りやは見し

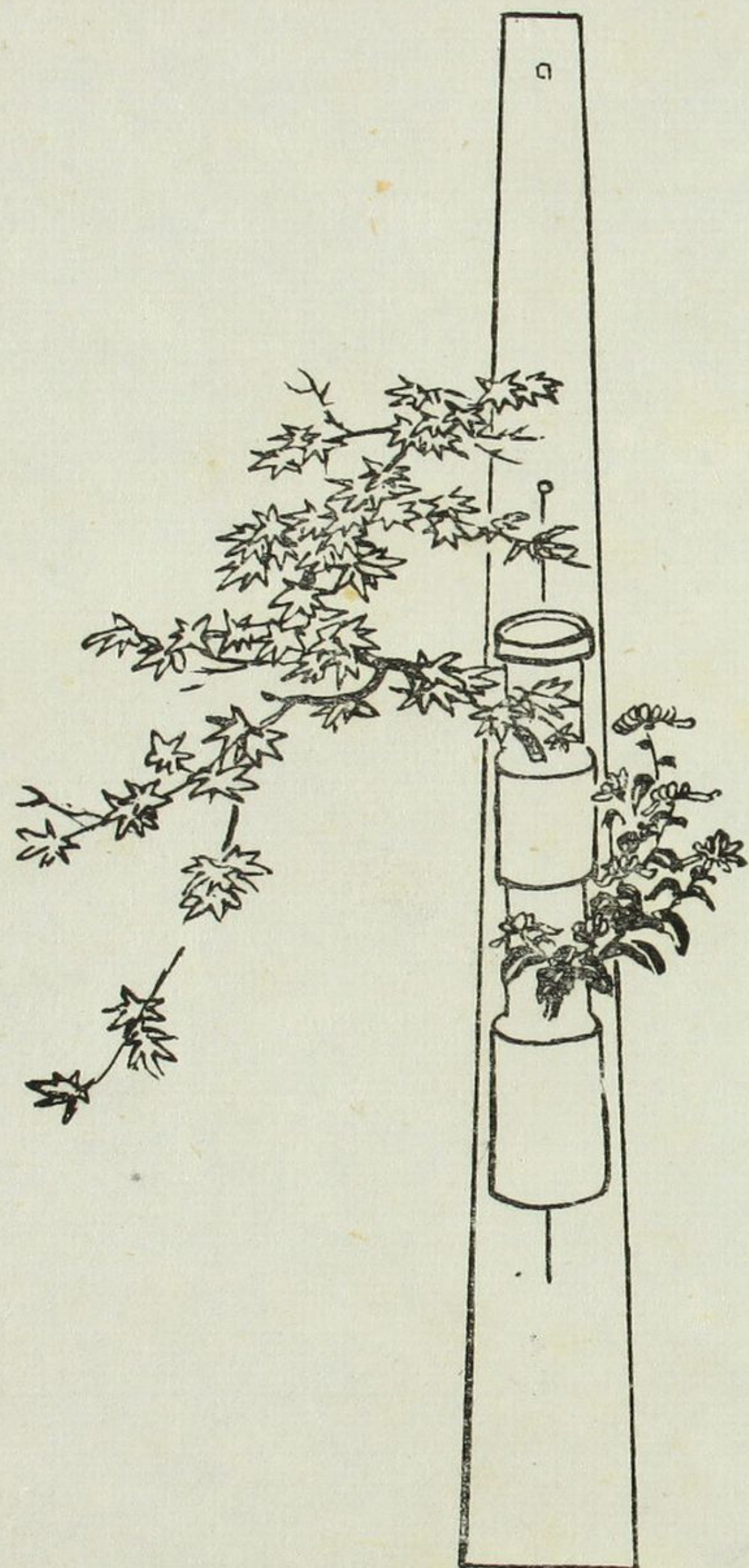
(註) 打ちきらしは霧がわたりしらみたるなり、昨日の朝曇りせし行幸にて空の光り、即ち

天顔もほのかなりしとなり。

花 説

頃	冬
器	掛二重切
材	紅葉 黄菊
方	別に傳なし、題号により口傳

大原野とは陛下が農作野の状況を御視察遊さるる行事で、紅葉を用ふるは明け渡る秋空の光の意、菊は陛下と見奉るなり。



三〇、藤

袴

玉鬘の君は源氏の君が頻に勸むる尙侍のことは猶諾否を決する能はず、源氏の君の戀は屢々貞操の不安を感じしむるに尙侍となれば、秋好中宮や弘毅殿の女御と寵を争ふ結果ともなり、何れ共氣も進まず居たり、三條の祖母宮は此世を去られ、喪服姿の玉鬘の君の容貌常より一層の美を添へたり、此時夕霧の君は同じ喪服姿にて來り、父の使者として密談あるにより侍女を遠ざからしめんことを求め、虚実を交へて傳言を終りたり、この言葉の後で愛慕の情を炎めかし、藤袴を御簾の端より差入れて次の歌を贈れり

同じ野の露にやつるゝ藤袴

あはれはかけよかごとはかりも

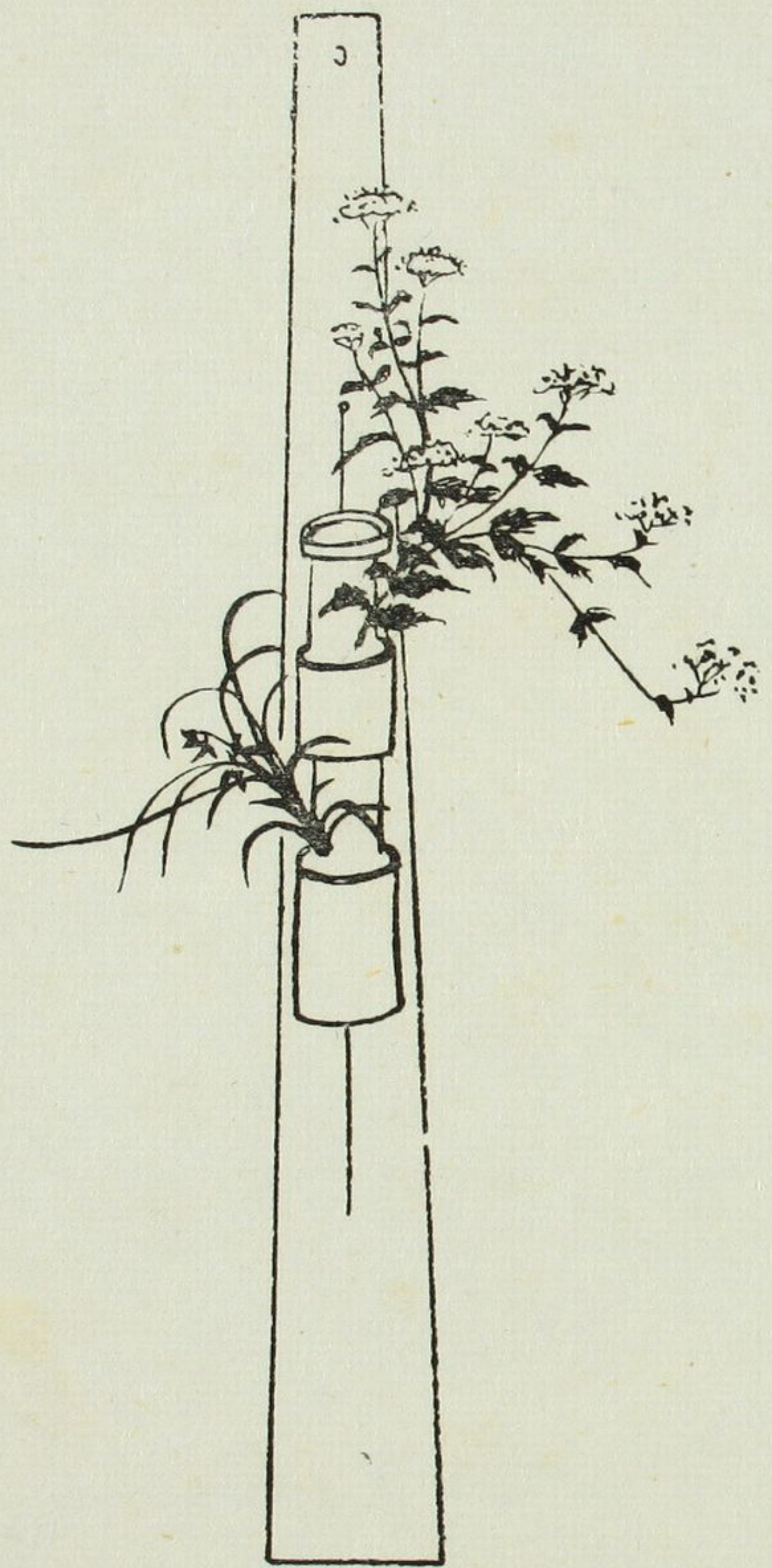
花 説

頃 秋 二重切
 器 藤袴 蘭
 材
 花 方
 生

初重藤袴を張らして生け、二重蘭を軽く生けるなり

(註) 初重は玉鬘にして二重は夕霧なり

藤袴は蘭草と書き、蘭をふじばかまとも讀ますなり、二人共藤衣を着け、同じ野に
 やつるゝ」との意なり



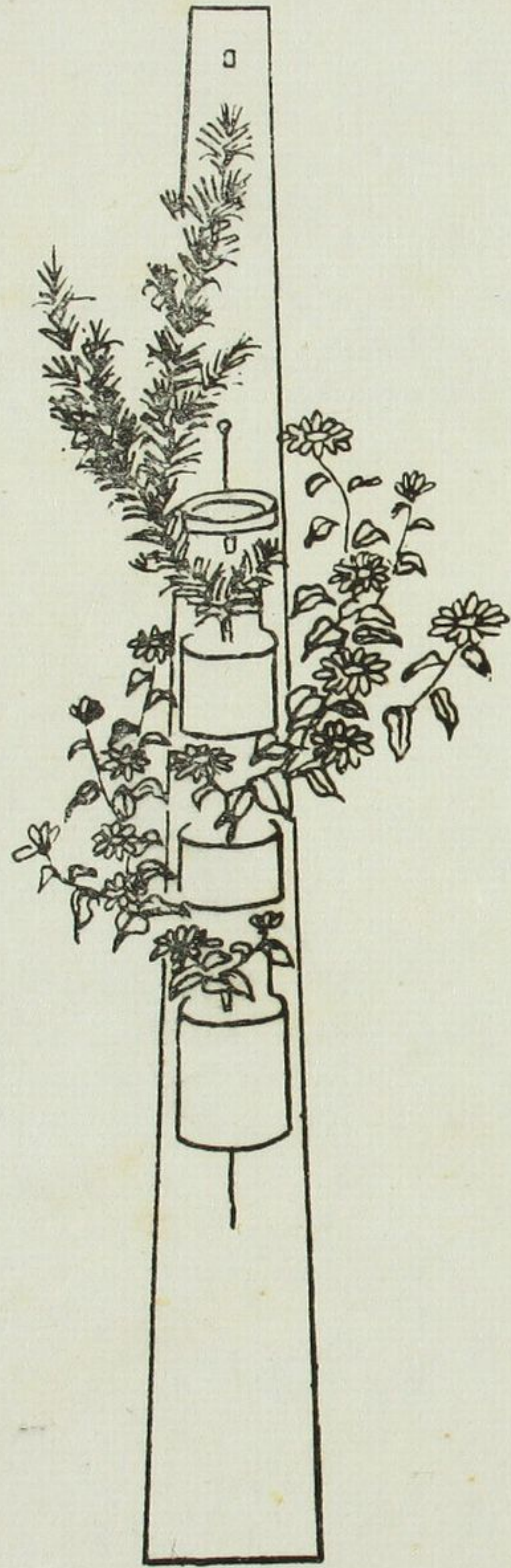
三二、横

柱

玉鬘の君の内侍として入内は十月と決定されたり、髭黒右大將は侍女弁の媒介で玉鬘の君と結婚をすることとなり、右大將には一人の夫人あり、嬉んで玉鬘の君を迎ふる理なければ、当分は此儘に六條院に居ることとなり。

右大將の夫人は式部郷宮の第一王女にして世間より尊敬を受け、容貌も誠に好き人なるも近年甚しき神経病にかゝり、右大將と夫婦とは名許りにして、別々に起臥するほどなり。

式部郷の宮は右大將が益々夫人を冷遇するを聞き、努つて遂に北の方を自邸に引戻せり、右大將には長が女で十二才、次に男の子二人あり、夫人(北の方)は三人の子を呼び「お祖父様の仰せの通り此の家を出ます、姫様は母様の傍を離れぬ人なれど、外の二人は男であるから又この家に来ることもあらう、お祖父様に憎れたり叱られたりせぬ様にと」夫人が泣けば小さい人等も泣き乳母も泣く「早く参りませう」と急ぎ立てられて、長女横柱の君は「もう一度お父様に逢ふて行き度い、夫れ迄は動かない」と打ち伏して、常に倚り居たる東面の柱を人に譲る心地



して、檜皮色の紙の重ねに唯聊に書きて、柱の干割れたる狭間に筭の先にて押入れたり

(姫) 今はとて宿かれぬとも馴れきつる

まきの柱は我を忘るな

右大將は帰りて此の事を知り、柱の歌を見て式部卿の宮邸に至りたるも夫人も宮も面会せず、十才と八才の男の子丈を連れ帰れり。

花 説

頃 器 秋
花 材 掛 三 重 切
生 方 檜 白 大 菊 赤 小 菊

序は直なることを可とす、或は輪抜などもよし、下の二重共生けとうし槇をば巻く心にて生くべし。

(註) 槇はまき柱を示し白大菊は夫人にして、赤小菊は槇柱の君が離れ難しと取り巻くの意なり。

三三、梅 枝

六條院に於て明石姫の裳着の式を挙げ、二月には春宮の御元服の式ありて、明石姫は東宮女御として入内あるべしと云ふ、源氏の君は裳着式の準備として織物等取り出し、又香は新古の両方を婦人達に分ちて各秘密裏に作らしめ、自分は正殿にて昔帝王御秘傳の香合せを爲せり、紅梅に艶なる雨の日に、螢兵部卿の宮來訪あり、源氏の君は宮に香の批判を乞ひ、此夜管絃の遊を催し宮は琵琶源氏の君は、箏の琴、頭中將（柏木）は和琴にて花やかに掻き立てたる程にいとおもしろし、夕霧の君は横笛吹きたり、折に合ひたる調子は、雲井に通るばかりに吹き立てたり、弁の少將拍子をととりて、催馬樂の梅ヶ枝をいとおもしろう歌へり、柏木の君礼讃し

鶯のねくらの枝もなびくまで

なほふき通せ夜半の笛竹

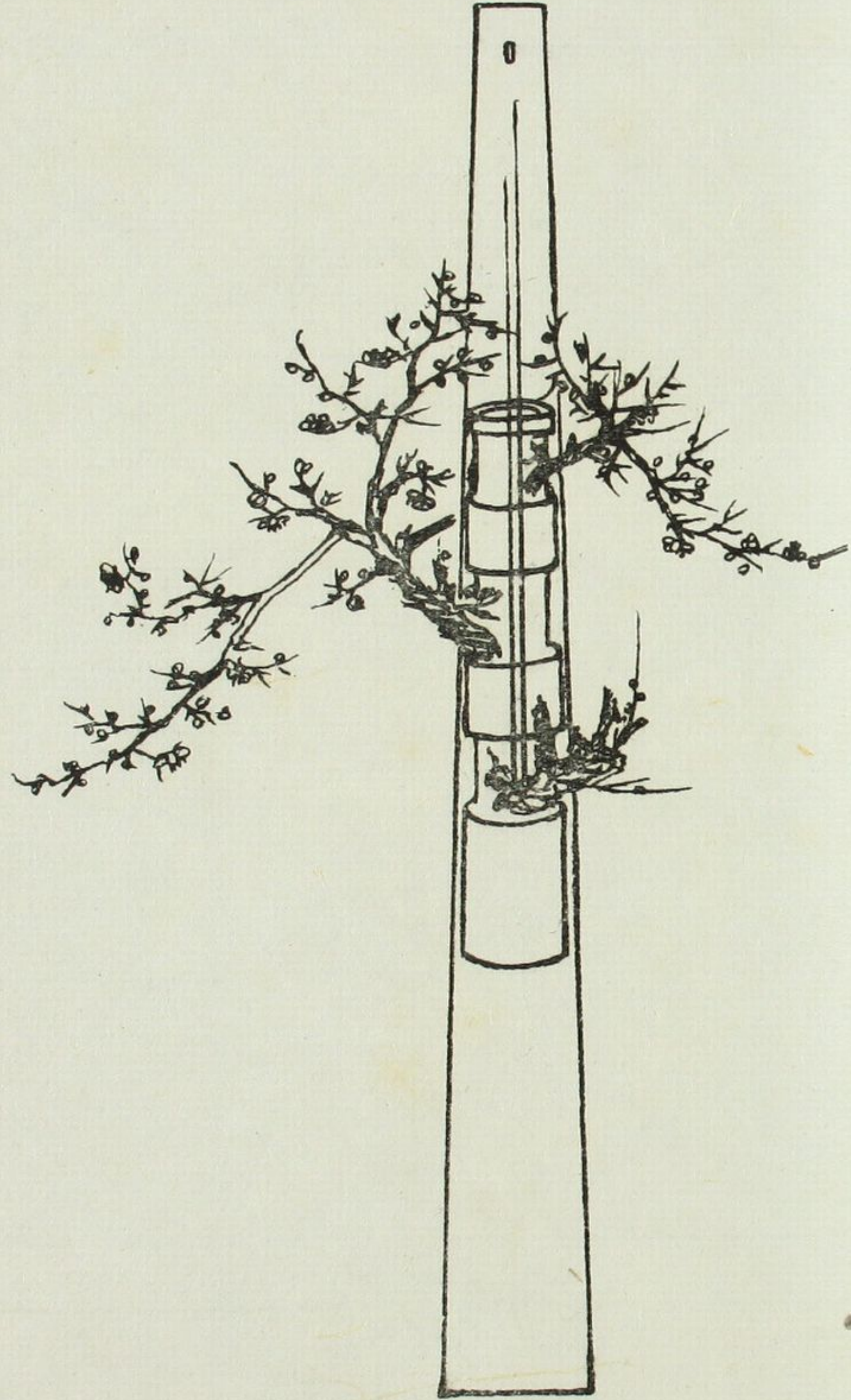
（夕霧の吹きたる笛の音をほめたゝへたる意）

かくて明方近く迄管絃を催し興ぜり。

花 說

頃 春 掛け置き共よし
 花 器 三 重 切
 花 材 梅 一 式
 生 方

三重序に限る、下重に株を生け一木一体に見するへし、夕霧の吹きし横笛の音にして、雲井に通るはかりの意なり素生へ二本は呵咩なり。



三三三、藤 裏 葉

三月二十日には故大宮の一週忌の佛事を極樂寺にて営なめり、夕霧も又参詣せり、四月に入りて庭の藤の花盛の頃となりしかば、宴を催し夕霧を招待せり、

暫らくは眞面目なる話斗りなり、後酒宴となり内大臣は春の花は皆一時に咲いて盛りが短かけれど藤の花は後れて咲いて、氣長に美を發揮すると夕霧の君に頻りに酒を進め、自らも亦酔ふたふりして意をほめかせり、柏木の君は花の色濃き、殊に房の長きものを折りて盃に加へ

手弱めの袖にまがえる藤の花

見る人からや色も増さらむ

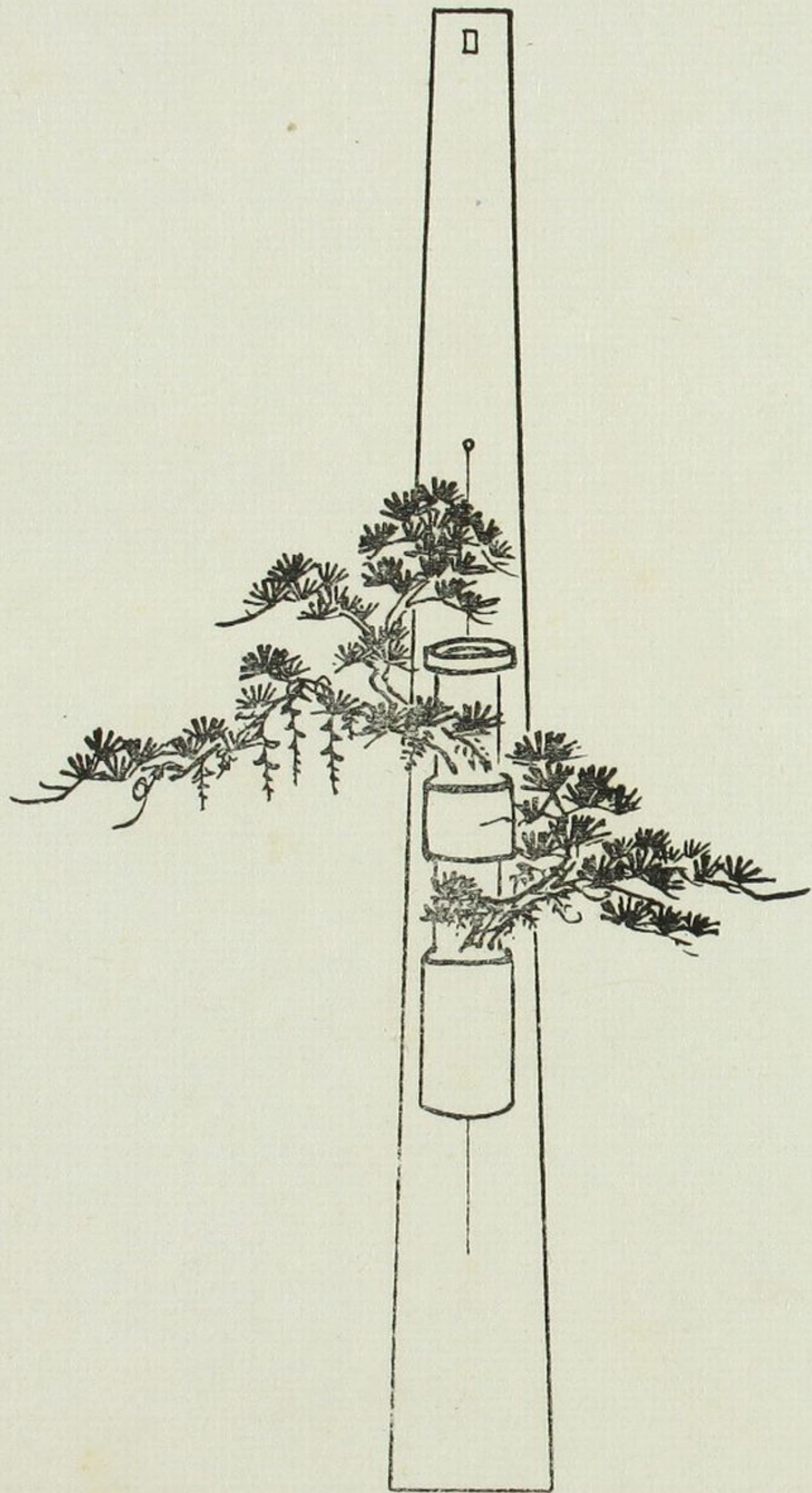
夕霧の君は酔ひて苦しき風情を装ひて、柏木の君に今宵は帰館し難しと云へば、内大臣は失礼すると席を去り、柏木の君は夕霧の君を妹（雲井の雁）の居間に伴ひ行けり。

花 説

頃 春 掛 二 重 切
 器 松 藤
 材
 花 方
 生

上下重共松を生け、松余り下りたる枝は悪しく能く据りたるものよし、下重の根元より藤生登し、月の輪の下にて松にかけ、下重には藤の照葉を生け、照葉は奥にて松に垂れてよし。

(註) 裏葉とは梢の葉を云ふ照葉とは光ある葉なり。



三四、若菜（上）

源氏の君も來年は四十才なれば其賀式ある筈にて、陛下も之れを好機とし、其秋源氏の君を太上天皇に準すべき宣旨を下し給ひ、一層の光を源氏の君の身边に添ひたり。

或日源氏の君は朱雀院の上皇のもとに至り、種々御話の末院は内親王達の事を案じ給ひ、迷惑は十分察しますが母のない内親王（女三ノ宮）を「あなたの妻として下さらば、私も安心が出来ます」と仰りたれば、源氏の君は御意ならばと御請したり、其年も暮れて正月二十三日は子の日にて髭黒左大将の夫人玉鬘の君は、源氏の君の四十の賀を祝して若菜を差し上げたしと申し送り、大将の御言付けにて四つと三つの二人の子を同じ様に振り分け髪、何心なき直衣姿にて連れ來り、お祝詞をのべたれば源氏の君は

小松原末の齡に引れてや

野辺の若葉も年をつむべき

と詠めり

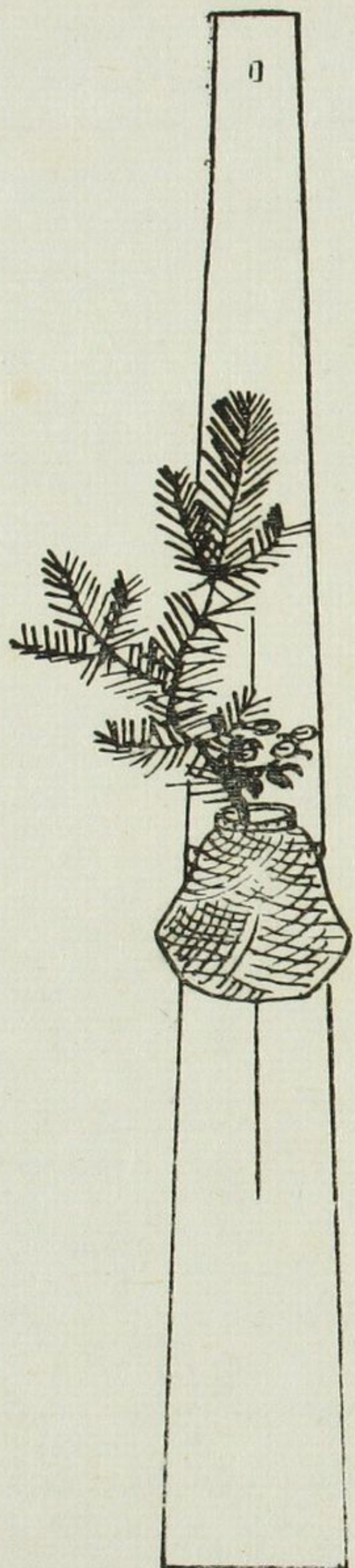
(註) 小松原とは末遠き人の齡に引かれて長壽の意。

花 說

頃	春	掛	籠	器	材	方	生
花	花	小	松	(伊吹にても不苦)	草	花	

小松よし伊吹にても奇麗に生け、あしらいは別に傳なし、全体奇麗に生べし。

(註) 春の初めに生ずる草を若菜と云ふ、小松原末の齡に引かれてやと云ふ、歌意にして小松の小松原、即ち玉鬘の子の意、草花は野辺の若菜印ち源氏也



三五、若 菜 (下)

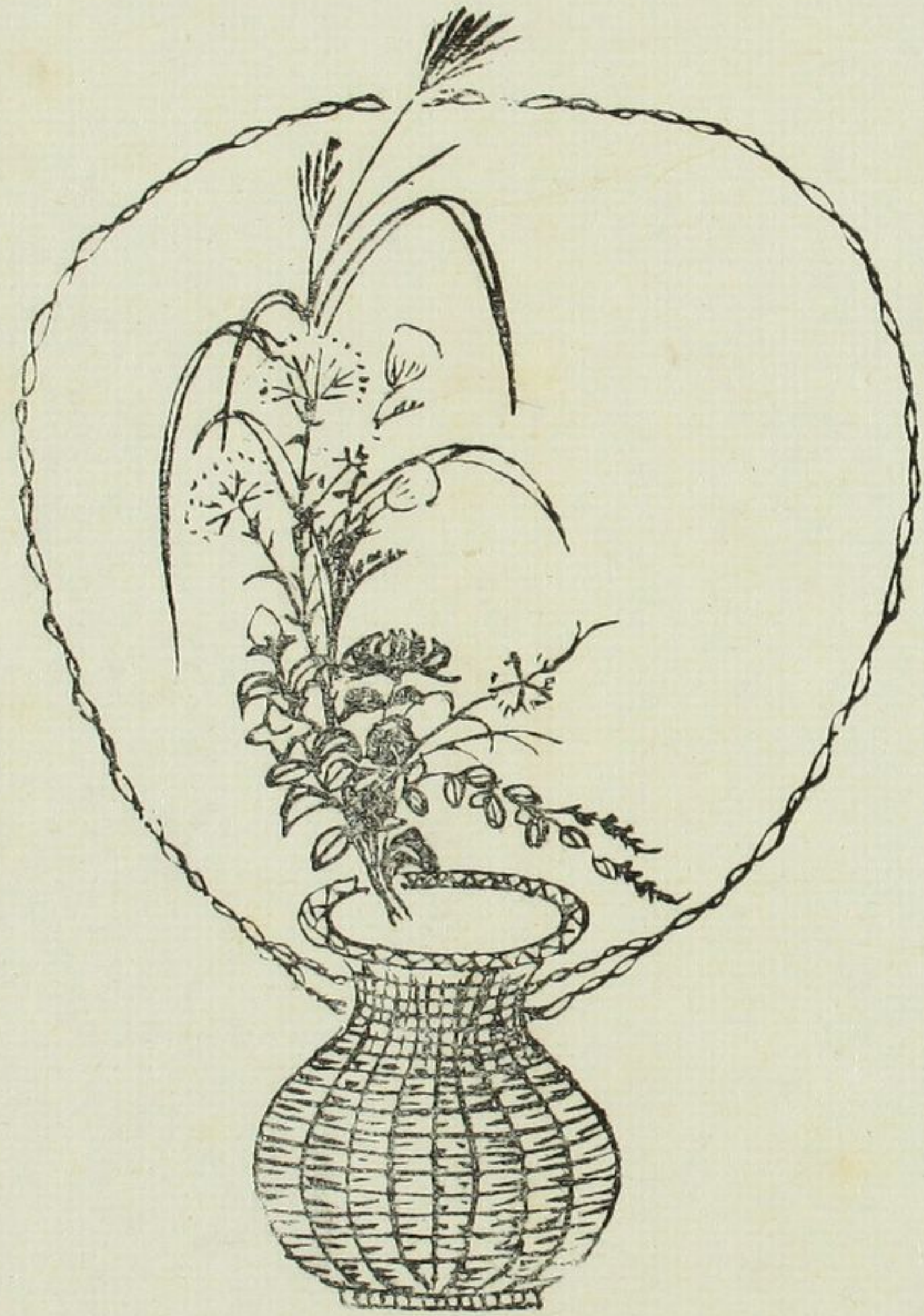
先帝(今上陛下の兄宮)朱雀院の五十の御賀を祝されるので、源氏の君は女樂を思ひ立ち、正月二十日頃に其試樂をして、同年十二月に愈々祝賀の御式を盛大に挙行されたり。
紫上、明石上、明石中宮などの演奏は何れも秘術を盡して行はれ、源氏の君は大いに嬉び満
足せり。

花 説

頃 花 花 生
 器 置 春
 材 草 花
 方 花 七種又は五種

花籠の如くに沢山生け、夫々の花の出生根元を現はすこと肝要なり。

(註) 朱雀院の五十の賀に準備として、六條院に於て七人の樂人にて其試樂をなせり。



三六、柏 木

柏木の君は中納言に任せられ、落葉宮（女二宮）を娶りたるも女三宮を忘るゝ事能はず、遂に女三宮と契を結べり、柏木の君は女三宮の懐妊した事、又源氏の君に此事を感知された事など、悔恨の情に悶へ病の床につきたり。年も明けたれ共柏木の病氣は次第に重くなりたり、女三宮も柏木と同じ憂氣に悶へながら遂に男子を出産せり。然して之れ迄重なる罪の報の怖しく遂に尼となりぬ、柏木の病氣は次第に重体となり、見舞に來たりし夕霧に向ひ、己の秘密を苦しき中よりうち明け、夫人落葉の宮の行末をくれぐれも依頼して、はかなく世を去りたり。夕霧は其後柏木に対する友情にて、度々落葉の宮を訪ひ慰め居たる内、次第に宮に対して戀情を覚へ歌にことよせて心中を打ち明けしかば、落葉宮は

柏木に葉守の神はまさずとも

人ならすべき宿の梢の

と返歌して應ぜざりき。

花 説

頃 花 花 生
 器 材 方
 夏 馬 柏
 盥 木 芍
 藥

柏を生け芍藥は根元を一所に生るなり、然し心は離るる氣持に生け、芍藥を履ふ様柏の枝を用ふなり。

(註) 柏は柏木の邸芍藥は夫人落葉の宮にして、葉守の神即ち柏木死して心ははなれたれども私の宿の梢のみにして、夕霧を入れるべきかざし枝はなしとの意なり。

兵衛(柏木の官名)は天子御幸の時前驅後衛を爲す武官の名なり、故に馬盥を用ゆるなり。



三七、横

笛

物哀れけなる秋の夕方、夕霧の君は落葉宮を一條に訪ふ。宮の母宮は非常に嬉びて柏木の遺愛の横笛を贈りたり、雲井の雁は夫が落葉の宮に思ひを寄せて居る事を知り、甚だ不機嫌なり其夜夕霧は柏木の夢を見たり、夢の中乍ら横笛に執着して

笛竹に吹きよる風のことならば

末の世なかき音につたへなむ

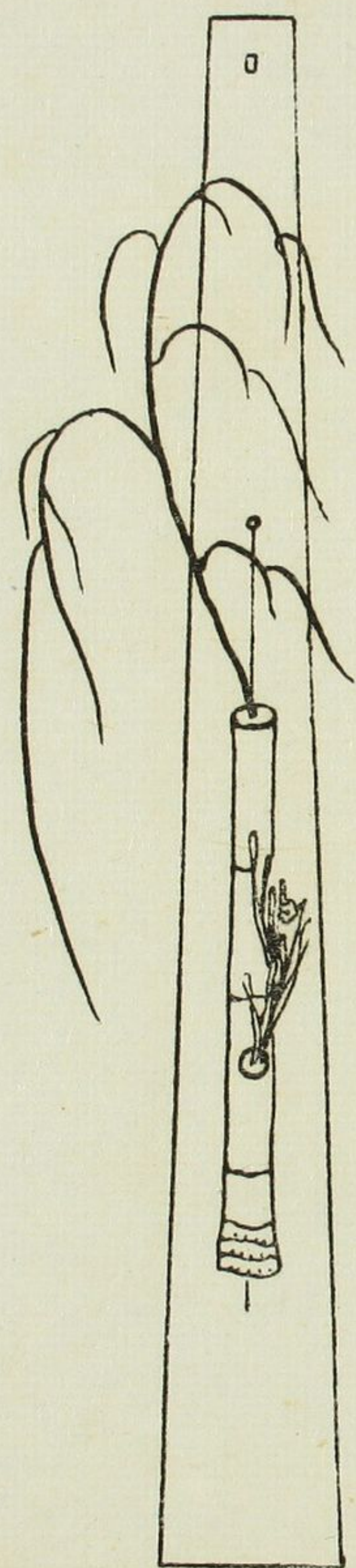
と、朦朧として現れしかど、夢より覚めて戦慄せり、此の事を源氏の君に語らひ、源氏の君は其の笛は薫にす渡可きものと思ひしが、それとなく話題をそらしたり。

花 説

頃 冬 掛尺八筒
 器 柳、白草花
 材 方
 花 生

柳七筋か九筋生くべし、柳の枝少し風の体あるべし、草花は筒に添ひて立てとうし、根元に深みを取るべし。

(註) 花器は横笛なるべきを尺八筒に代へたるなり、



三八、鈴

蟲

秋に入り尼宮（女三宮）の御庭の一部を秋辺の野の如く造らせ千々の虫を放ちたり、風冷やかに吹く夕べ源氏の君入り來りて、虫の音いと面白き夕かなと低、声にて宮の念佛に合唱せり、庭の虫は色々の声で鳴き出したれば、源氏の君は秋の虫の声何れとなき中に、「松虫は人の居らない所ではよくなきますが、人氣の多い處ではなきません、どうも隔心ある虫ですが、鈴虫は心易く何処にても鳴きたいと云ふ風だから可愛らしい」とて次の歌を送りたり

心もて草の宿りをいとへども

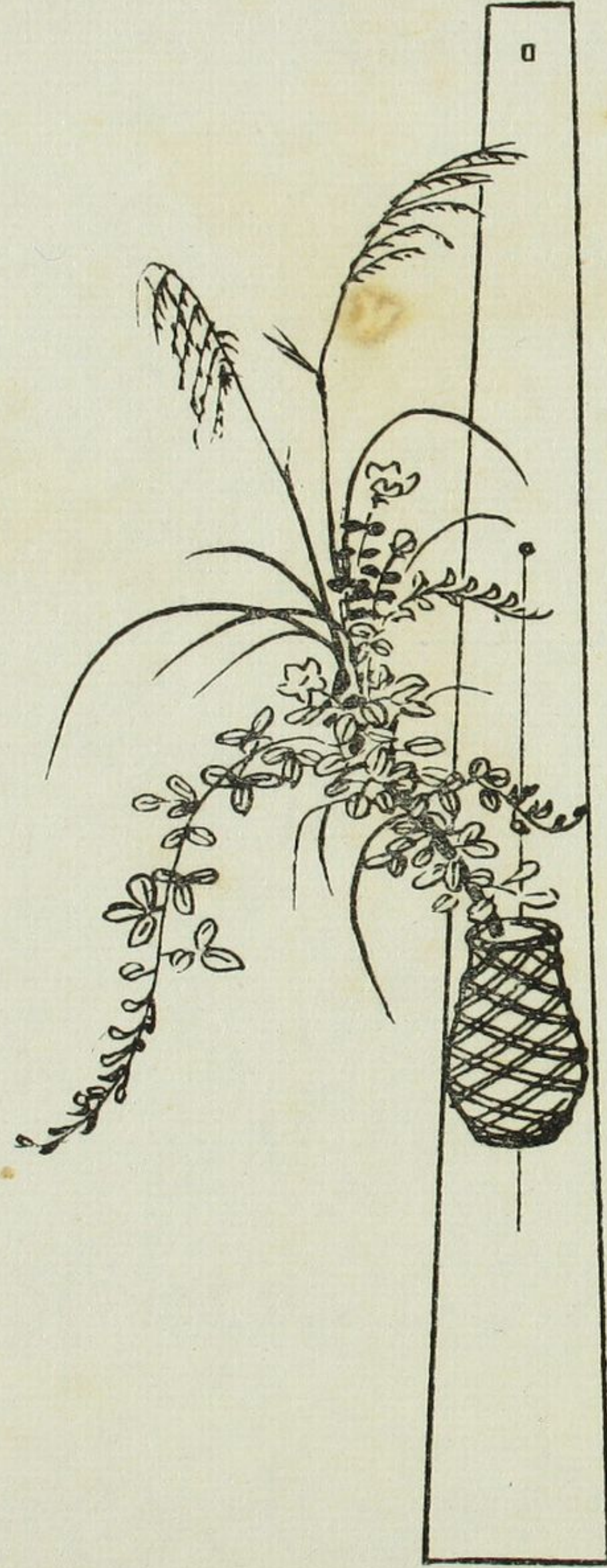
猶鈴虫の聲ぞふりせぬ

花 説

頃 花 花 生
 器 材 方
 秋 掛 萩
 籬 結 梗

萩と結梗にても芒、萩、結梗、交せても生くべし、鈴虫も居る様と云ふ趣なり。

(註) 尼宮の庭に鈴虫鳴けるより、歌意に宮を鈴虫にたとへ我は捨てざるものをとの意なり。



三九 夕

霧

年月と共に夕霧の君は落葉の宮を忘るゝ能はず、恋の焰を胸に隠しながら、亡き柏木の君の
友情らしくよそおひて、落葉の宮と其母更衣の病める小野の山莊に一日訪れたり、母更衣は夕
霧の厚意を謝し居たり。

或る霧深き夕方霧は

山里の哀を添ふる夕霧に

立出でむ空もなき心地して

とて終夜落葉の宮に戀情をせまりたれ共、如何ともなす能ず、遂に夜は明けたり、

花 説

頃 器 掛 籠 秋
 花 材 女 郎 花 小 菊
 生 方

女郎花と菊とは生け交ぜ、水際に女郎花の莖を見せ、後より小菊を副ひ、ばらくと交合ふ様に生くべし、女郎花を夕方霧と見立て、小菊を夕霧と見るなり。



四〇、御法

紫の上は大患以來兎角健康勝れず次第に弱り行くを以て、予ての志願通り出家したしと思ひしも、源氏の君之を許さず、紫の上の御願ひにて千部の法華經を書せたるを、佛の前に披露する法事を二條院に於て営むこととなり、花散里の君、明石の君、なども來りぬ、頃は三月十日花盛りにて空の景色もうららかに、面白く佛の極樂とも思はる、大勢の僧の読經する声が莊嚴の中に一種の淋しさと、心細さを感じければ、明石の君は

薪なる思ひは今日を初めにて

此の世に願ふのりぞはるけき

と詠みて紫の上の此世を去り行く事の近きをかなしめり。

かくて八月十四日の明け方紫の上はかくれ給へり。

花 説

頃 秋 薄 端 器 伊 吹 白 菊 生 花 材 方 しのぶ

伊吹を半月にかけて上に生けとふし序にすべし、後の眞に菊を低く立つべし、しのぶは奥深く副ふべし、總てを枯淡に幽寂の情を主とすべし。

(註) 伊吹半月は十四日の朝月の残れるの意なり。



四一、幻

源氏の君は紫の上、世を去りしより、一層暗き悲しみに閉されつゝ年改まりて、年賀の客は例年に交らねど病氣と称して対面もせず、遊ふ事も少なく何れの所へも行かず、紫の上のありし時には好色深くして物を思はせし事など思ひ出して、後悔する事もあり、源氏の君の力の落し方は甚し、只三の宮（明石中宮の子）だけは慰藉者の一人であつた、降り続きし梅雨も晴れて月影も珍らしく見ゆ、夕霧の君來り紫上の一周年忌も近くなりましたが、とて法事のことども打ち合せて父源氏の邸に泊れり。十一月の時雨勝ちなる頃、源氏の君は夕暮の空を眺めそぞろ哀愁にさそわれ

大宮を通ふ幻夢にだに

見え來ぬ魂の行方尋ねよ

と独り言ちぬ。

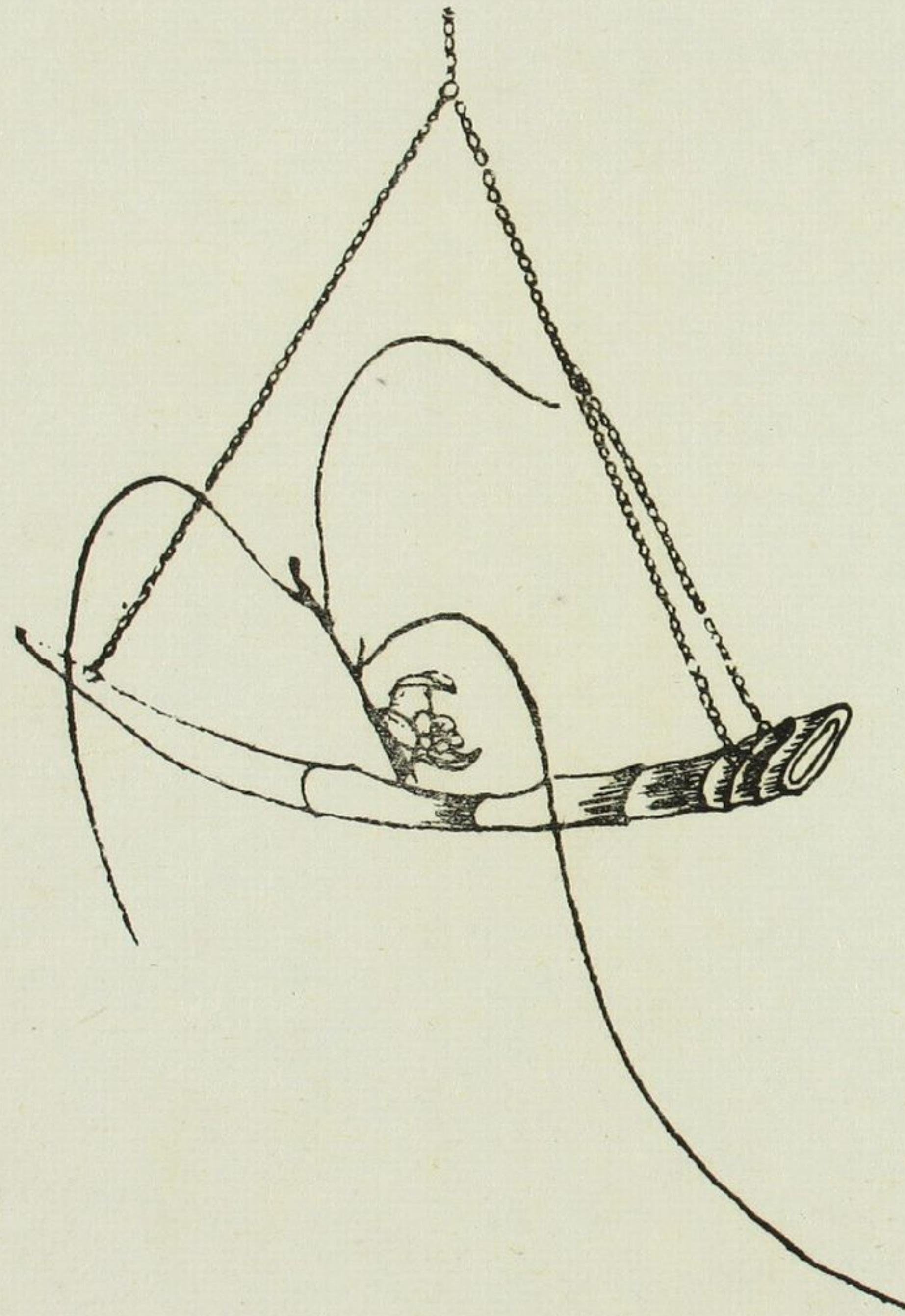
花 説

頃 冬 船 白玉椿
 器 釣
 材 柳
 方

柳三筋に限る一筋は序に二筋は前に出す。根締に白玉椿一輪葉三枚か五枚を生くべし、ぼんやりと寂しき情を現はすべし。

柳はやさしき美人を意味し、白玉椿は即ち紫の上の魂魄なり。

花器の船は、忽聞海上有ニ仙山一山在ニ虚無縹緲間一にて船を釣るなり。



四二、匂宮

源氏の君薨去の後は風流男、華奢男として源氏の君の後継者と見るべき者なし。

おりゐの帝冷泉院をとやかく較べて云はんは畏れ多き極みなり、唯一人は源氏の君の孫宮（明石中宮の子三の宮）と一人の実子（女三宮の子薫）とのみであつた、三の宮は元服ありて兵部卿の宮と申す薫の君は、十四才にして元服し侍従となり、直ちに右近衛中將に任ぜられ、位階も共に進みたり、此薫の君の容貌はそれほどの美男には非らね共、氣品高くえも云われぬ良き薫りの持主にて、人呼びて薫の中將と申せり、兵部卿は之を見て羨ましく思ひ、種々の香り高き植物を庭に植へ、身に薫をふくませることに苦心せり、人之を呼びて匂ふ兵部卿と云へり扱て薫中將は幼時の頃より不思議なる事心の奥に潜み居たれり、それは源氏の君が折々我に謎の如き物語をされし事あり、己れの生れ出づるに付きては、何か複雑な背景ありしに相違なしその真相を知り度しと思へ共採る糸口もなく

おぼつかない誰に問はまし如何にして
 初めもはても知らぬ我身ぞ
 と尼宮の未だ盛の年なるに、俄に尼になられし事どもをあやしめり。

花 説

頃 冬 三重切
 器 梅 嫌 (中) 白 菊 (下) 蘭
 材 方 生 花 花 頃

梅嫌前に張り出し中の重の白菊は真中に真に生け、下重蘭を生とうし、上重梅嫌と手違ひに生くべし。
 (註) 卷名の匂宮とは薫中將と匂兵部卿との双称なり。
 匂兵部卿か春は梅秋は菊藤袴地掾などを植へて、身に香氣をただよはす意也。
 梅嫌は梅の代用蘭は藤袴地掾などの代用なり。
 中の重白中菊は匂宮なり。



四三、紅梅

今の按察大納言は、柏木の君の弟弁の少將と云ひし人にして、官等も進み勢力も加はりて侮り難きものあり、前の妻は死亡し、今の妻は髭黒大政大臣の女眞木柱の君にして、元は源氏の弟瑩兵部卿宮の北の方として一女を設けしが、宮薨去の後此大納言忍びて通ひ、遂に姫君を引具して來れるものなり、又大納言には先腹に二人の女あり、眞木柱の君との間に一男を生み、継女も連子の宮も両親は隔を置かず、何れも同様に愛せり、今年十八才になる上の女を春宮女御に奉ることとせり、次の女（中君）は一つ年下にして、上品に艶かしきことは姉にも優りたれば、匂宮にと志し居たり、或日大納言は中君の御簾の前に座し琴の音を聞き、若君にも笛を吹かしめ自らは皮笛を吹きてかき合せり、軒端の紅梅のいと面白く匂ひたるを一枝折り、次の歌を添へ

心ありて風の匂はす園の梅に

まづ鶯訪はすやあるべき

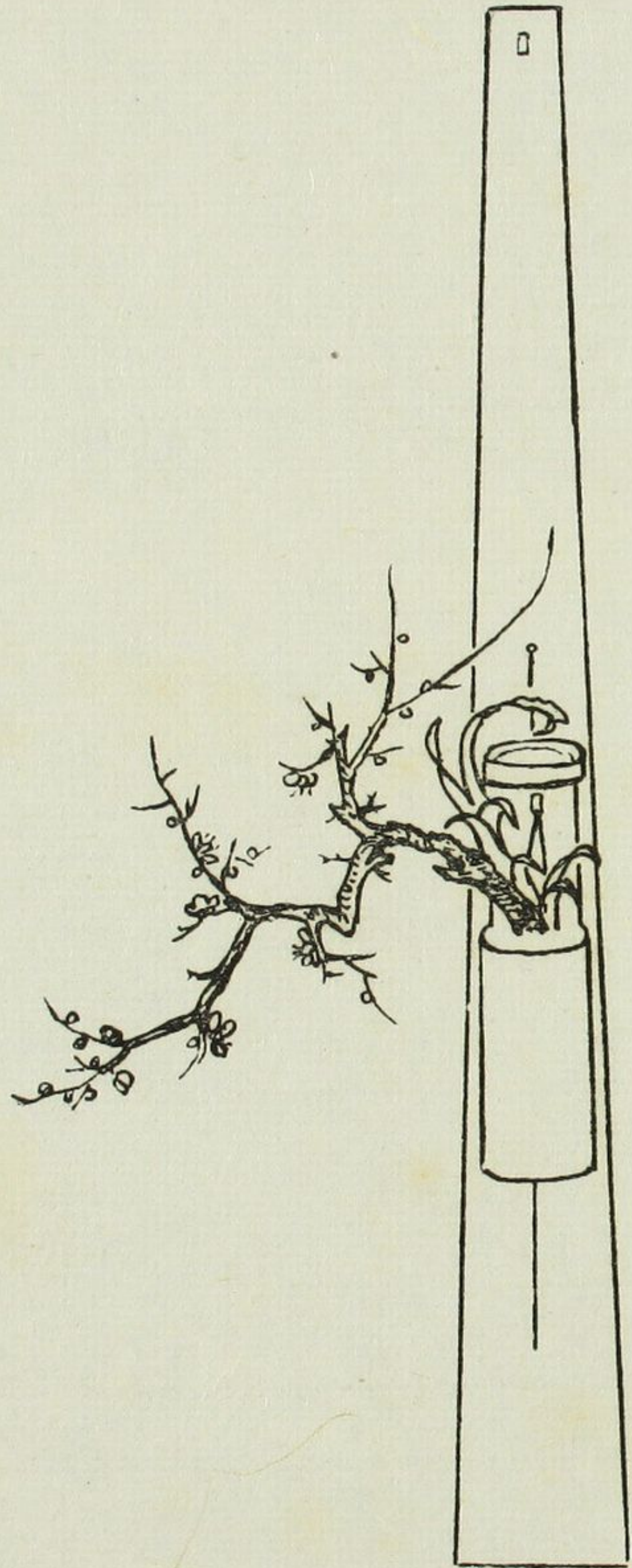
とて匂宮に贈りたり。

花 説

頃	春
花器	掛一重切
花材	紅梅 著我
生方	

紅梅を手厚く異体に生け、著我を後より副ふ先き枯れの葉を月輪の上に登し、青葉は葉先き釘穴を見かけて登す様に生る事手なり。

(註) 紅梅を手厚く異体に生くとは(軒近き紅梅のいと面白く匂ひたる枝)の意味にして著我の枯葉は軒端の意にて青葉は檜扇の意なり、紅梅の大臣(大納言)が扇子を以て口(花器の釘穴を應用す)を覆いて皮笛を吹けるなり、皮笛とは口の内にて嘯ぶき吹く事即ち口笛なり。



四四、竹川

尙侍玉鬘の君の生みし髭黒大臣の子は、男三人女二人にして大臣俄に病死し、遺族の者は只夢の如くに思はれ、予期せし姫君の宮仕へは其儘となれり、此後姫君のことに付けて、陛下よりも宮仕への御催促あり、冷泉院よりも是非にとの御所望ありたり、稀に見る美人なれば恋する人も多し、夕霧の君の子藏人少將も熱心なるその一人なり、又四位の侍従薫の君は年十四五才なるも、大人びて而かも落付あり、將來栄達の見込みあるを見ては、母の玉鬘は娘の婿としたりき心地もせり、正月になりて玉鬘の君の兄弟や、夕霧の君も息子達を連れて來れり、梅も盛りになりし正月二十日頃の夜、薫の君は玉鬘の君の子藤侍従の所に行き、中門を入ると直衣姿の若き男隠れんとす、引留め見れば甥の藏人少將なり、少將を案内者として妻戸を押し開けて入れば、人々と琴を掻き合せ居たり、やがて七絃琴を差出され、薫の君之を弾き少將は催馬樂の曲の竹河の歌を歌へり、然るに藤侍従は父故大臣に似て風流の道には堪能ならずも、竹河を將と同じ声にておかしく歌ふ、簾の中より土器差出でたるに、如何なる歎待ぞと薫の君は極り少悪げに盃を受けて逃げて歸れり、翌朝薫の君より藤侍従のもとに

竹河のはしうちいてし一ふしに

婦かき心の底はちりきや

との歌を送れり。

花 説

頃 花 生

器 材 方

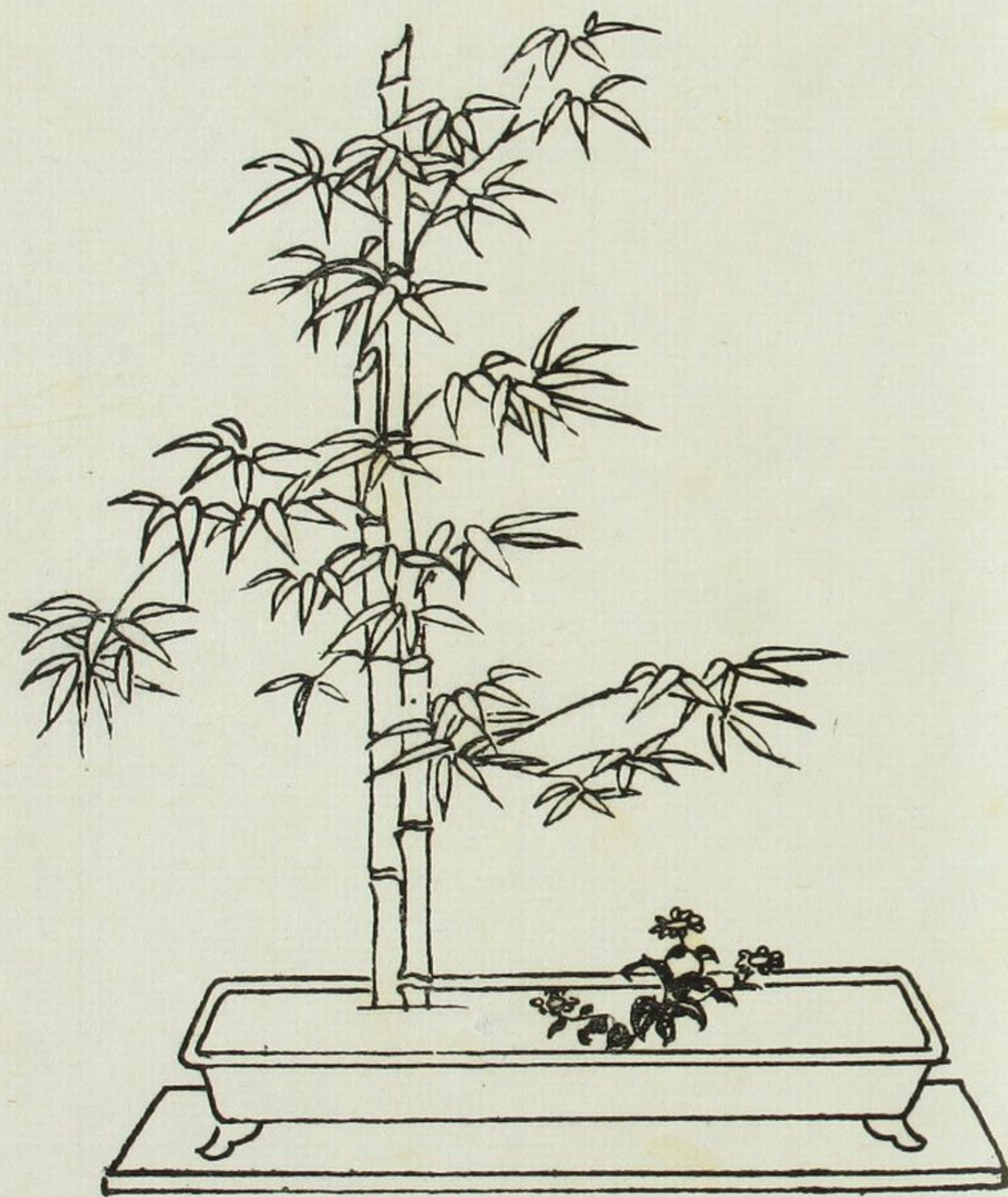
秋 鉢
砂 鉢
竹、白菊若くは白草花

竹を向ふの花器際に生け、白菊（又は白の草花）を花器の前際に、即ち前後の株分けなり竹の一枝を白花の上に出し縁をとり、其竹の節に心を用ゆべきこと。

（註）白の草花は薫にして竹は玉鬢の子の姫なり、竹河の歌を歌ひしにて、我真意を知りつらむ姫を許し給へとの意を採りしものにして、竹河の一節とは催馬樂の曲の内の歌の歌ひ出しの意なり。

花器砂鉢は竹河の縁に由るなり。

竹は一名このきみとも云ふ、竹を花器の向ふ側に生くるは竹河を歌ひし時には姫は簾の奥に居たれば斯くするなり。



四五、橋 姫

桐壺帝の御子源氏の君の異母弟たる八宮は、母后が春宮に立てんと思ひしも、冷泉院（藤壺の御子）を立てんとする源氏派の反対にあつて実現せず、権勢も失墜す、夫人は大臣の娘にして二人の姫君を産み間もなく薨去したれば、宮は今では出家の如き清き生活の内に姫の成長を樂み居たり、不幸にも此宮邸は火災に罹りたれば、宇治の山莊に移住されたり、今は訪ふ人も少く、只宇治のあじやりのみが訪れて佛法を説くのみ、此あじよりは時々冷泉院にも伺候して御経など教導し、或時八宮の佛法に熱心で「俗であつて俗を離れた俗聖だ」と語るを丁度薫の君も居合せて之を聞き、自分も心の底に潜む厭世觀を我と客觀して、ついに八宮のもとに案内を乞ひ、其後は度々訪れ、物質上の援助や姫達のことども懇に世話をされ三年に及べり、ある日自家の留守居をなす弁と云者曰く「私は柏木様の乳母をして居た者の娘で、あなた様のお身の上に付いてお話し申し度い事があります」と云ふ、薫の君は之を聞き、自己の心の深底に潜む謎が明るみへ露出された様を感じたり、それより帰途西座敷の方へ廻りて川の面を眺むれば、小船に柴を積み行き交ふ様の世の中の者共の、果敢なき水上に浮ぶ様を我身に比べて我も玉のうてなに静けき身と思へど、之れとて頼り難き假りの世なりとて硯召して姫君達へ

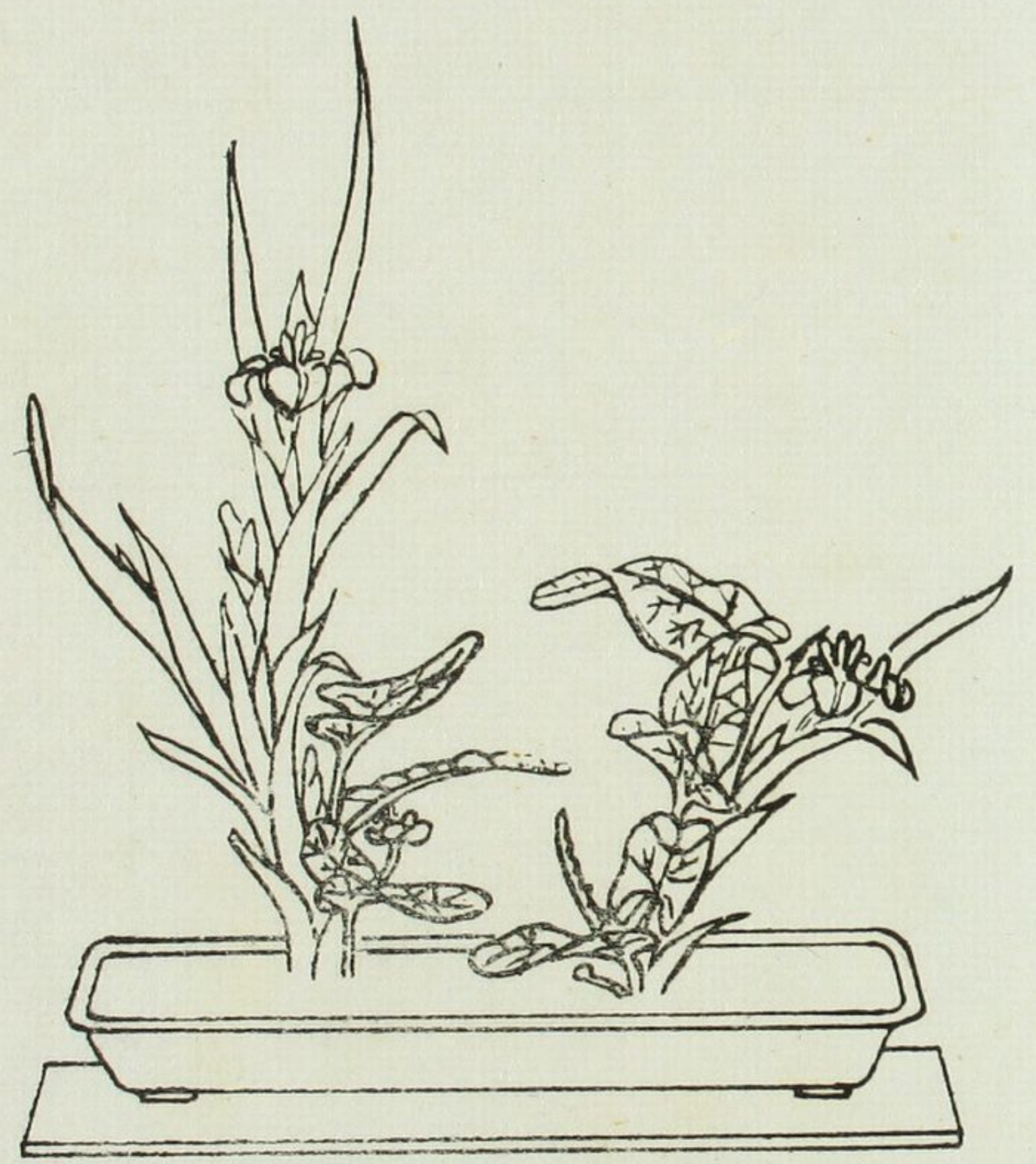
橋姫の心を汲みて高瀬さす
 棹の雫に袖そぬれぬる
 と送りければ、姫よりも返歌あり、同情の内にも又戀しくも思へり。

花 説

頃 夏 大 廣 口
 器 大 廣 口
 材 牡 若 河 骨
 方 生 花 花 頃

本株に牡若三株、河骨一株、分株に牡若一株、河骨二株を生け、河骨の巻葉にて本株より分株へ橋を掛ける也。
 此橋は巻葉一本にてよし。

(註) 宇治橋の橋姫に住吉神社の通へるになぞらへて、薫の君が八の宮の第一姫に心を寄するさまなり。
 河骨の巻葉は宇治橋と見立つ、巻葉の下の花は橋姫なり。
 本株は薫の君、分株の牡若の花は姫なり。



四六、 椎 本

薫の君は十月初め宇治に行きたり、八の宮は喜ろび是を迎へ、種々話の末我若し他界の後は
姫達の行末を頼むと託せり。薫の君は若し不吉の事あらば、及ばず乍ら後見の役を勤むる事を
約せり、宮が佛の勤めをせらるゝ間辨を呼び、先の話掛りの續きを聞き、相木が實の父なるを
聞き驚き且感涙にむせびけり。

匂宮は二月二十日過ぎ大和の長谷寺に参詣し、歸途夕霧の山莊に一泊なし、兼ねて薫の君よ
り八の宮の姫達の事を聞き及び居たりし爲、是に立寄り度きと思ひたれ共、遂に訪問の本意を
達せず空しく歸京したり、其後匂宮は度々文を姫の下に送りしが、其の返事は妹姫の手に依り
て書れたり、八の宮は姫達に我なき後の事ども語り、勤行のためあじやりの寺に入り給ひしが
今日を終りと云ふ日に寺より使ありて、薨去の悲報に接して女王達は底知れぬ深き淵に突き落
されたる心地したり、薫の君も之を聞きて哀悼せり。

薫の君は年新まりなば用事も多からむと俄に思ひ立ちて、雪の中を宇治に來れり、姫君も嬉
しく迎へたり、夕霧は御簾近く座を占めて遂に苦しい胸を姉宮に打明けしが、姉宮は動する氣
色もなし、匂宮も妹宮の事忘れ能ず、薫の君に其取持を依頼したり、自らも又文を送るなどせ
り、故宮の居間も今は御床など取拂ひたれば、薫の君は左の歌を認めたり。

立ち寄りむ蔭と頼みし椎が本
空しき床になりけるかな

花 説

頃 花 花 生
器 材 方
冬 馬 晒 赤 忍
盥 木 山 草
花 花 花

晒に山茶花を副ふ心にて生け、忍草は晒に寄生したる様に八の宮を忍ぶ意にて、三枚か五枚を副ふ。

(註) 立ち寄りむ云々との歌意を取れり、立寄りむと頼みし椎が本は空しき床、即ち晒となれり、山茶花は薫、晒は故八宮なり。

花器の馬盥は薫の君が屢々馬にて通ひし縁に由るなり。



四七、總

角

宇治の姫君は多年聞き馴れし河風も、今年の秋はいと物悲しくて、八宮の一週忌も近づきければ、法事の準備も多忙を極む、薫の君は一週忌間際になりて宇治に來れり。姫君達は香机の飾として總角を絹糸にて編み居たり。薫の君は此の様を御簾の下よりちらつと見て、此の程よりの恋慕の情を筆のすさびにしたゝめて

總角に長き契を結びこめ

おなし所によりも逢わなむ

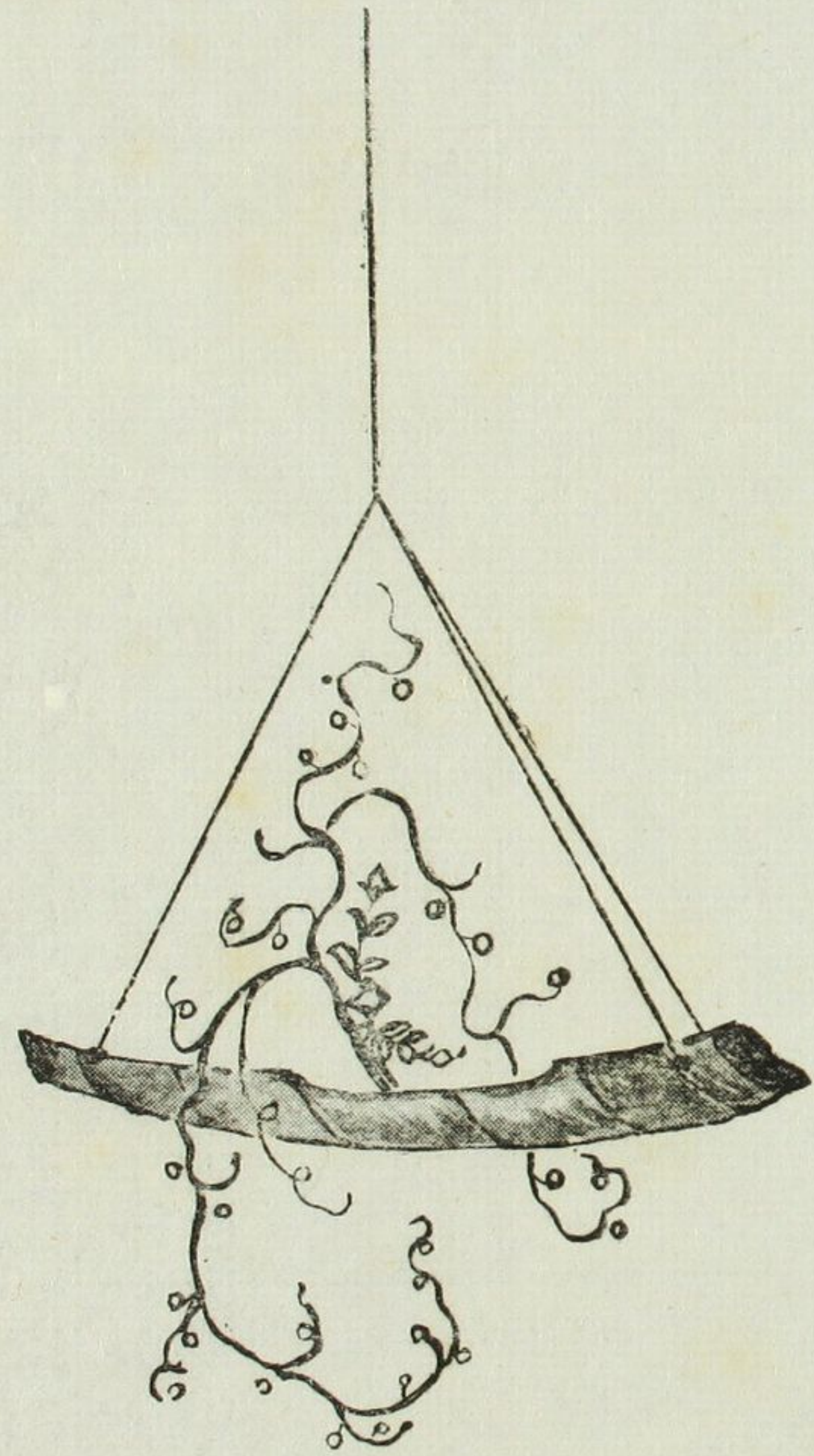
と書きて姉姫君に送りしに、姫君はいとはしたなしと思ひ、歌にことよせ之を拒ばめり。

花 說

頃 花 花 生
 秋 釣 器
 舟 り 材
 蔓 物 桔 梗 小 菊 不 苦
 方

蔓物を舟の前後両方に出し中に桔梗を副ふべし、蔓は前に出し先を上に登し、後へは短く出し是も先に登すなり。

(註) あけまきとは昔の小兒の髪のかき方の名なり、又紐のかき方の名なり、簾鏝などの飾りとす、蔓物あけまきの君にして桔梗又は小菊は薫なり、長き契りを結びて同じ所に寄り合はむの意にて、桔梗又は小菊を附け副ひとすも返歌の意に於て(ぬきもあへずもろき涙のたまの緒に長き契をいか結ばん)前後両方に垂らしたる蔓物の一方を短かくするなり、垂れ蔓は組紐と見立つるなり。此の總角は八宮一週忌の香机の飾り紐なれば、法の舟の縁により且又花器より垂らす故に釣り舟を用ゆるなり。



四八、早

蕨

姉姫は病の床に就きしかば、薫の君は其看護に赴きたりしが、遂に病重くなり十一月他界せり、姉姫は父宮や姉姫に死別し、一人淋しくあじきなき日を送り居たれり、翌年一月になりてあじやりは新年挨拶と共に、蕨や土筆に歌を添へて贈答せり、

君にとてあまたの春をつみしかは

常をわすれぬ初わらひなり

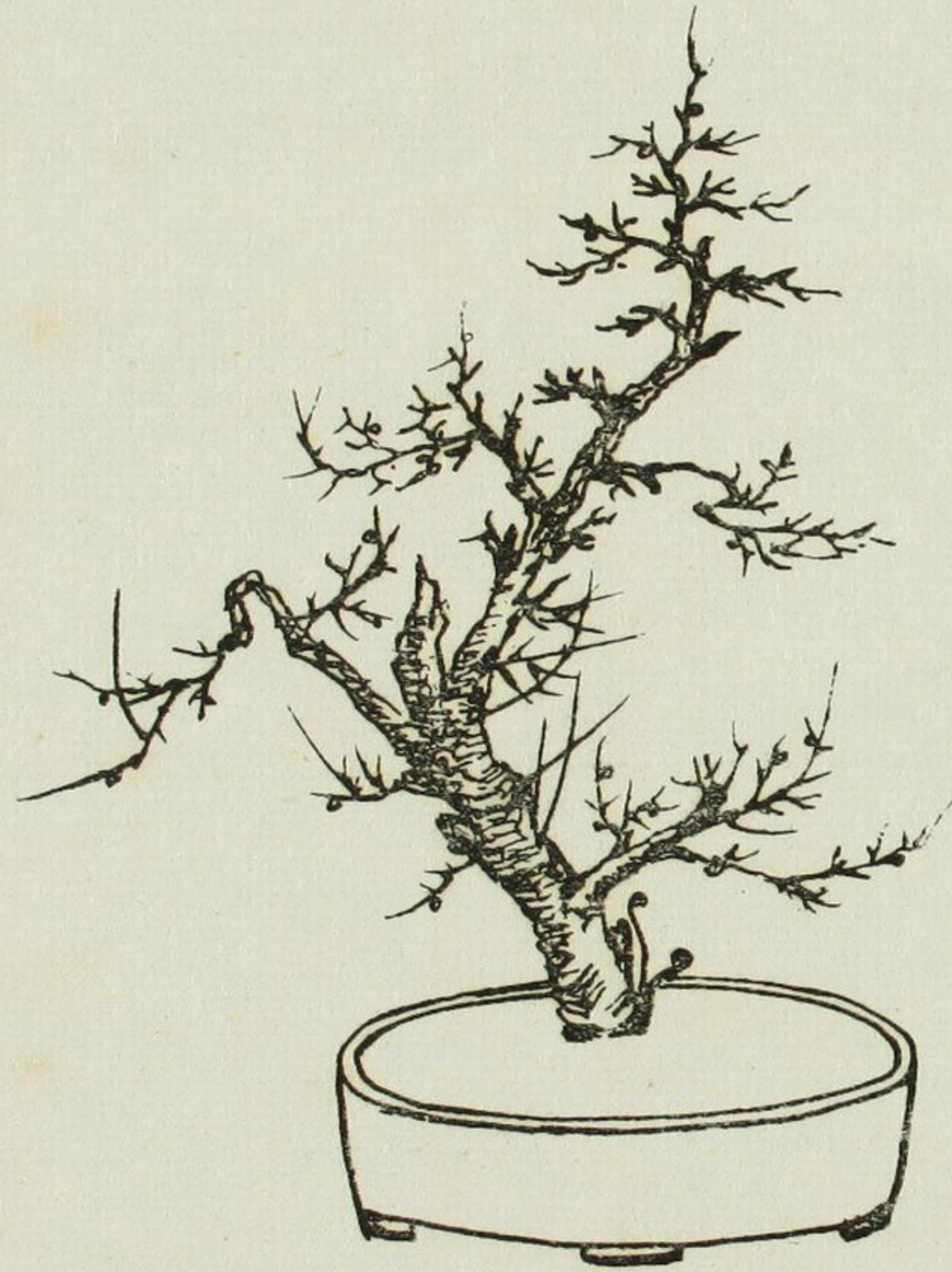
姉姫はそれに付けても亡き父や姉の在りし日を偲ばれ、悲しき心を匂宮によりてなくさめられて居たが、遂に二月七日に二條院なる匂宮の下に迎へられたり。

花 説

頃 春
 花 器 廣 口
 花 材 苔 梅 わらび
 生 方

苔梅を生け、後の方より蕨生べし、梅を見て計らず蕨を見出したる心得あるべし、わらびは五本か七本位をよろしとす。

(註) 梅は奥山の老木故花なきとも若しからず、花器廣口は父姉共に死し、狭き山莊も今は廣き心地せるより用ゆ。



四九、宿

木

薫の君は故八の宮の女姉姫に想ひをよせしも、はかなき死に遇ひ、妹姫は匂宮と二條院に移りたれば、今は只一人侘びしき日を送り居たり、何となく宇治の空恋しく度々通へり、九月二十日過ぎ又もや宇治の山莊を訪れたり、山姿流水の音、秋風の韻は静寂なり、老女辨より細々と昔物語を聞き、追憶の涙に咽びたり、宇治より歸京後二條院の夫人（妹姫）を訪れ、宇治の蔦紅葉にこの歌を添へて贈れり。

宿り木と思ひいてすは木の下の

旅寝もいかにさひしからまし

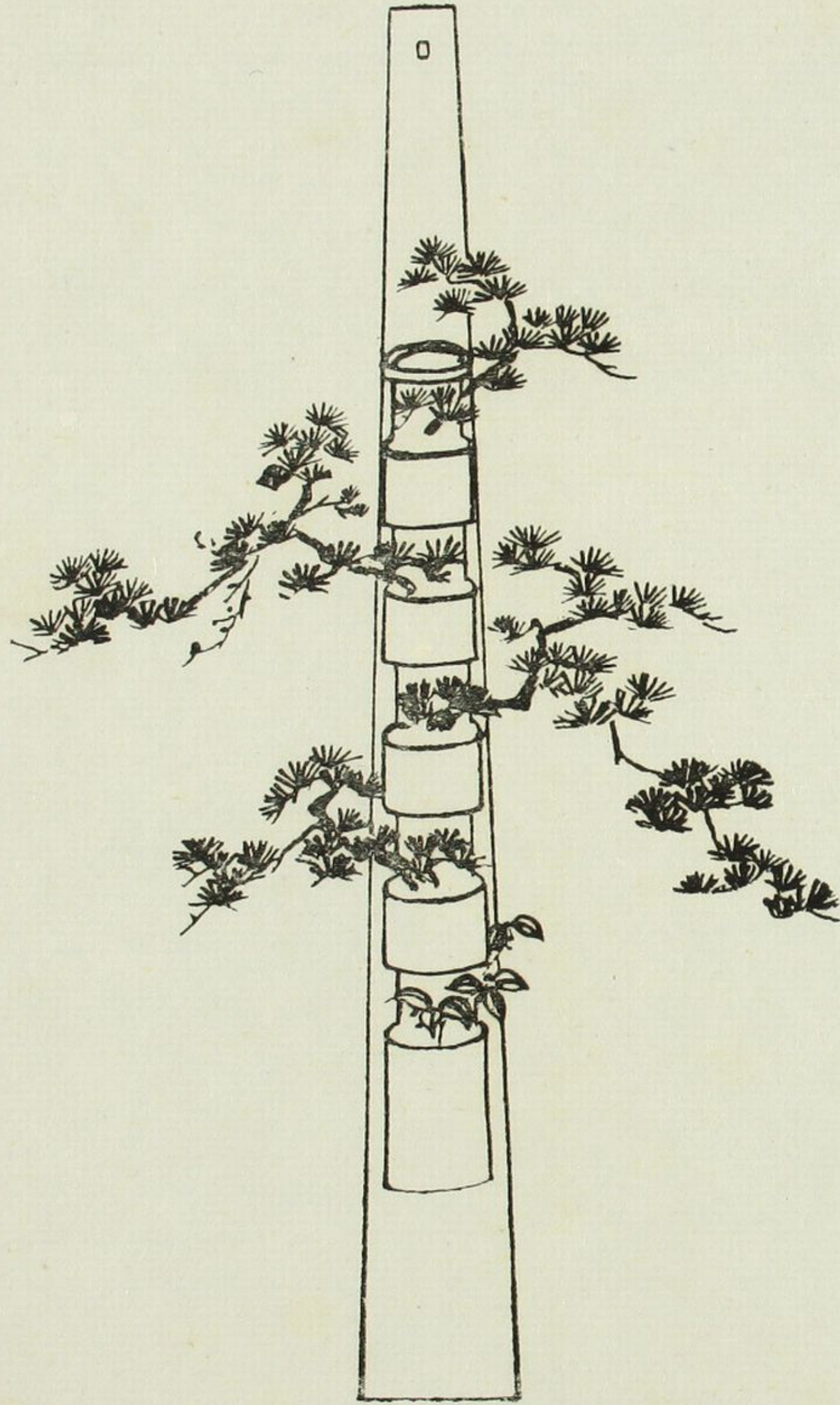
（註）宿木とは思人の古郷の意。

花 説

頃 花 花 生
 秋 器 材 方
 五 重 切 松(朽木にてもよし) 松ぐみ 籤柑子

初重序に限るべし、四重目迄松を生け、五重は籤柑子を生く也。

(註) 老松の形なるべし、梅又は松みどりは宿木として、二重の破の手の下に遣ふ、三
 四重共宿木を遣ふ事もあり、一木一体なる事極肝要なり、籤柑子を薫の君と見る
 なり。



五〇、東屋

故八の宮御在世の頃中將の君と呼ぶ女性ありて、一女を擧げたり、名を浮舟と云ふ中將の君は八の宮の死後浮舟を連れて常陸介に嫁したり。浮舟は養父常陸介の任地より京に歸り、父八の宮の墓参りの爲宇治の山莊に赴けり、遇然薫大將も居合せ浮舟の姿をみて、亡き戀人の（姉姫）の再生かと眺め入り、今や浮舟に對す戀情日に増したり、浮舟を乳母と共に二條院の中君に託せり、折しも薫大將の來訪あり、中將の君は薫の立派なる容姿を垣間見て、此の人ならば先様の望通り君に差上げてと思ひ、中君に萬事を託して歸館せり、匂宮は宮中より退出して歸途西の對に居る浮舟の姿を見て近づきしが、侍女に練められ夫人の方へ行けり、母中將の君は是を聞き不安を感じ、浮舟を三條邊のざればみたる小家に隠したり、秋深くなりし頃薫大將は久々にて宇治に行き、辨の尼をして自からの想ひを浮舟に傳言させたり、其夜薫大將は京に歸り自身祕かに三條を訪れたり、夜に入りて雨少し降り、風冷やかにふき、云ひ知れぬ匂ひに薫の君の訪れしことを知りその由を奥に通ぜり、薫の君は暫らく田舎びたる簀子の端に座し、待ちわびて

差し留むるむくらやしき東屋の

あまりほどふる雨そ、き哉

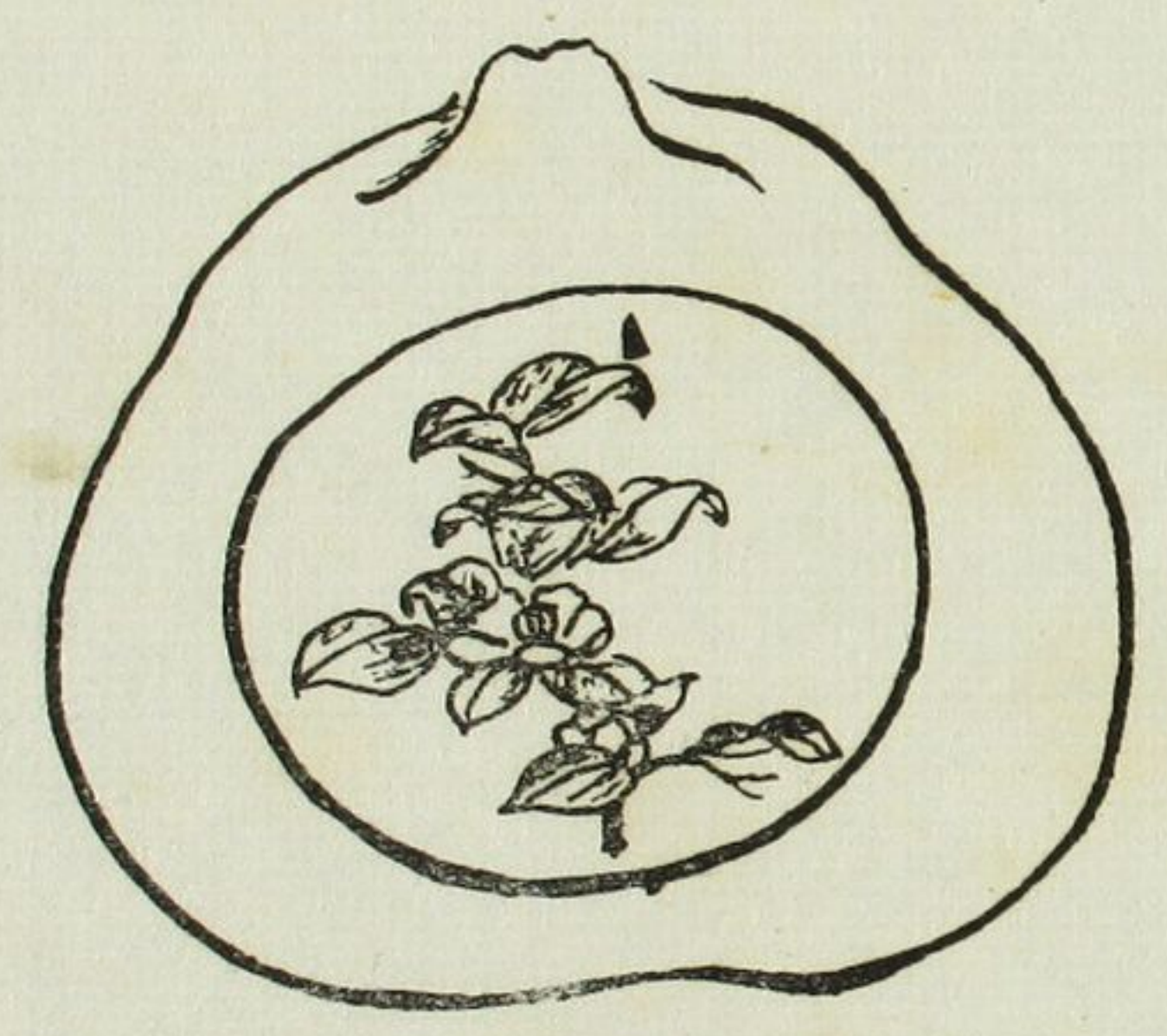
(註) かく久しく待たすは、或はへだつる人のありてかとの意なり。

花 説

頃花花生
器材方
秋瓢白
(ふくべ)
椿

花を洞の中に能く据へ、覆ひ葉は洞の外にても工合よくすべし、花は二輪にても三輪にて
もよし、葉数は何枚にでも見合すべし。

(註) 東屋とは屋根を四方に葺きおろしたる質素なる造りの小屋にして、壁なく柱は四
本なり、三條邊のざればみたる家の未だ抄々しき説備なきより東屋と云ひ、之れ
に母中將が浮舟の君を隠したる所なり。
瓢は東屋にたとへて用ゆるなり。



五一、浮

舟

匂宮は二條院にてちらりと垣間見たる浮舟の事が懐かしく、思慕の情にかられたり、正月始め方浮舟より中君に参らせたる文を奪ひて見たるに浮舟と云へる姫は、中君の妹君なる事然も今は薫大將の想ひ人になりて、宇治に住居せる事を知りて妬み心をやる方なし、薫大將に於ては今は重任の身柄なれば、足繁く宇治へ通ふ事もならざりき、匂宮は此の虚に乗じて一夜宇治に赴き闇に紛れ浮舟に近きたり、浮舟は去年の秋の事どもを話し掛けられ、以前にも薫大將にあらずして匂宮なることを解し驚きしが、如何ともする事能わず、翌月薫大將よ閑を得て宇治に行きしが、浮舟の沈み勝なる面持をみて様々に慰めたり、其後匂宮も或雪の日密かに宇治に行き、浮舟を連れ出し宇治川のたちばなの小島に遊び、匂宮との契りは愈よ深まり何時迄も變らじと

橘の小島は色もかわらしを

この浮舟を行方知られぬ

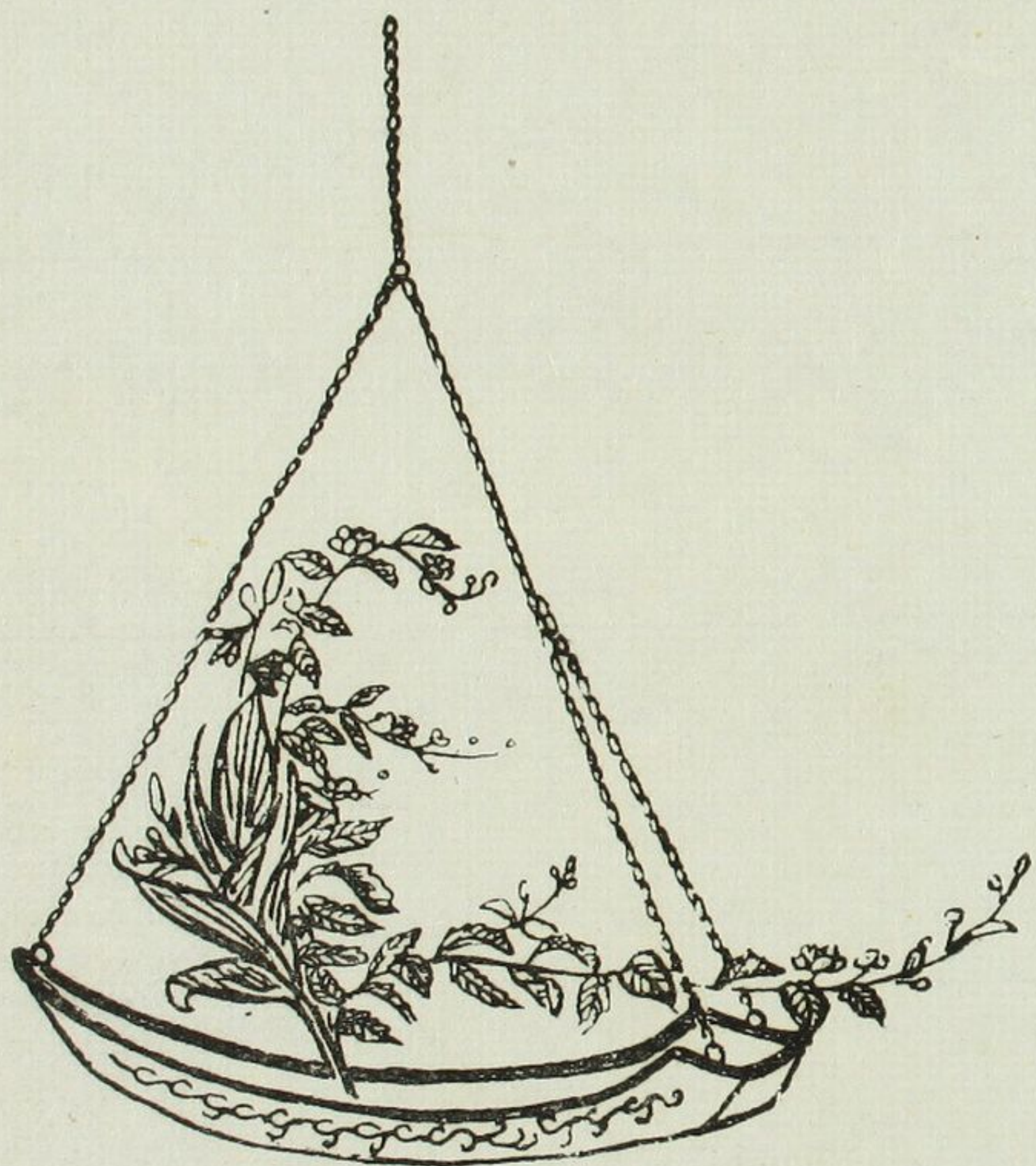
と歌へり、此處に二日許り暮し、宮は浮舟を山莊に送り置きて二條院に歸れり。

花 説

頃	春
花	釣舟
花	器
材	山吹 紫蘭
生	方

山吹を生け、控又は急より流し枝を用ひ後方の鎖二筋の間を通し梶の体になし、舟の舳へは葉ばかりの枝一本軽く立登し、陰方に紫蘭を副ふべし。

(註) 山吹は花美しけれ共、實はなくして浮舟の君に似たれば、山吹を浮舟の君とし紫蘭は香あれば匂宮とし、匂宮が舟中にて浮舟を抱きて河を下れる意也。



五二、蜻

蛉

浮舟の君は自らの祕密の薫大將に知れたる時は只死の外なく、母には不義の娘よと疎まれ匂宮の愛をうけなば自然噂立ち、女王の耳に入りなば如何に辛からんと心を碎きけり、薫大將は愈々浮舟を京へ移らしめんとせしが、匂宮は之に先じて窃かに奪ひ伴わんと思へり、或日薫大將の家臣と匂宮の使者が偶然にも宇治に來合はせたる事より、薫大將は匂宮と浮舟の關係を知り女の貞節無き事を怨み文を送りたり、浮舟は愈々運命の窮極の日來れりと覺り死を決つしたり。或朝宇治の山莊にては浮舟の居らざるに驚ろき、母も京より馳せ付けたり。右近と侍従とは浮舟の煩悶せる事情を知りたれば、投身せるものと思へり、匂宮は悲しみの極茫然とす、薫大將も御母女三宮の病氣祈禱の爲石山に參籠し居たりしが、變を聞き直ちに歸京し宇治に馳せ參ず、右近に合ひ死因に付き聞き糾し、涙ながらに懇に弔へり。四十九日の法事も營みせめてもの心やりとせり、然し薫大將は折に觸れ浮舟の身の涯てを考へ、悲嘆の涙にむせびるたり或る夕方蜻蛉がはかなげに飛び交ふ様をみて

と獨言せり。

ありと見て手には取られずみればまた
行方も知らず消えしかけろふ

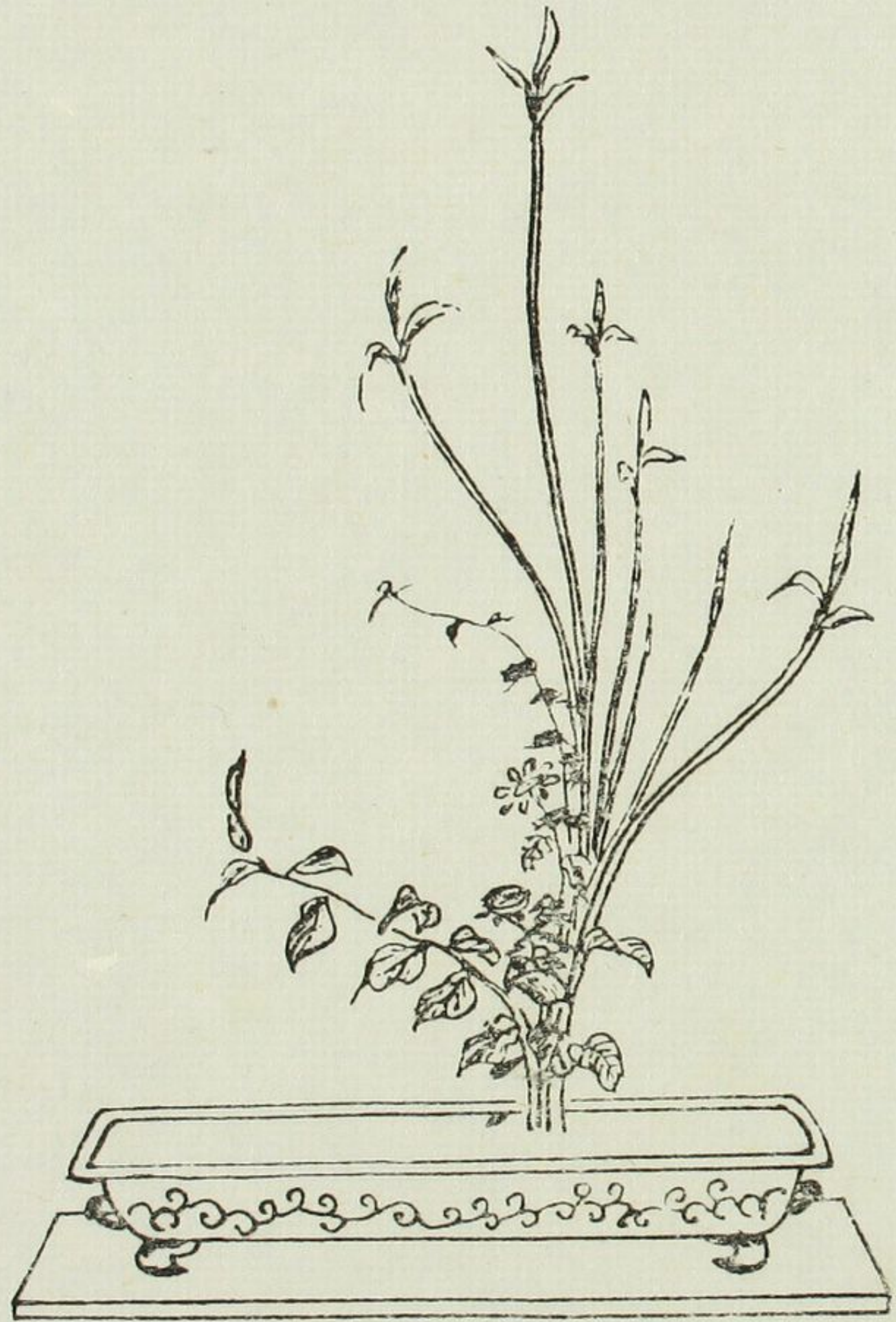
(註) 薫の君の追憶にして浮舟を偲ぶ心なり。

花 説

頃	春
花器	廣口
花材	いたどり
生方	春菊

いたどりを生け、根元に葉を澤山に用ひ、後ろに春菊をかすかに見え隠れの様副へる所が手なり。春菊は三世相をあらわし生くる也。

(註) かけろふは陽炎なり、又蜻蛉の古名なり、花器の廣口は度き場所と云ふ縁なり。



五三、手

習

比叡の横川に尊い僧都あり、その母と妹は共に尼にして、初瀬詣の歸途母尼が病氣になりしため、僧都も山より下りて宇治の院にて靜養せり、その夕方弟子なるあじやりが森蔭に怪しき女の死体を見付け種々介抱せしかば漸く蘇生したり、尼も嬉びて我子の如く抱き入れたれど、女は素性も語らず只泣くのみなり、斯くする内に母尼の病氣も快復せしかば、一同は比叡の麓なる小野の庵に歸れり、この女こそ行方知れざりし浮舟の姿なりき。浮舟は僧都より佛法五戒の教を受けあじきなき日を送り、又人恋しき折には手習ひしつゝ、悲しき歌など書きいたり

はかなくて世にふるかはのうき世には

たつ手もゆかし二本の杉

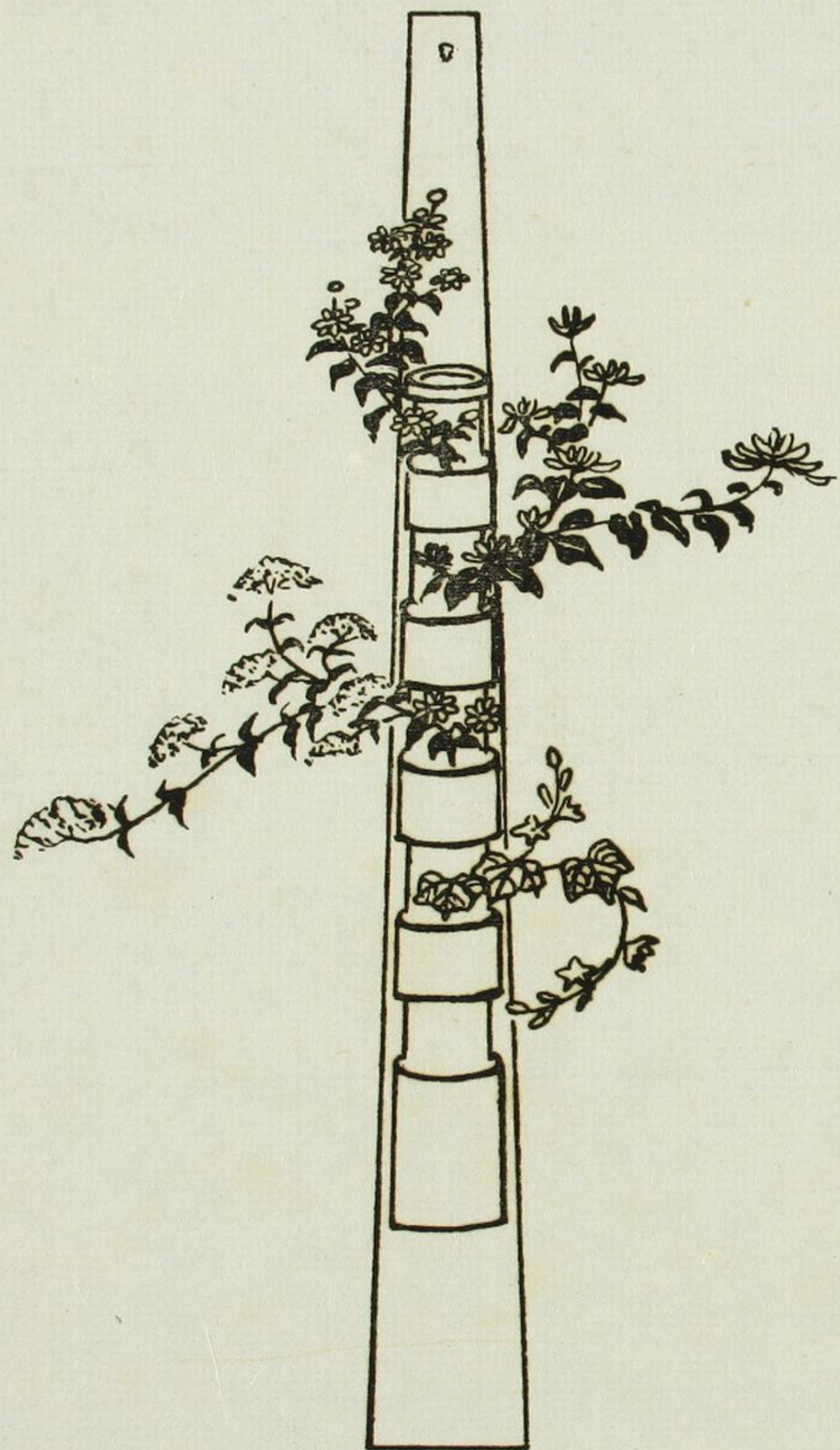
(註) 二本の杉は薫の君と匂宮の意なり。

花 説

頃	春 夏 秋
花 器	五 重 切
花 材	草花五種、下重水ばかり
生 方	

初重席にし、二重常体也、三重に二種生け、四重目より生け下ける枝は、筆頭と心得五重目に縁をとる様に用ふべし、五重目は硯の海と見て水ばかり也。

(註) 花器の五重を用ふるは浮舟が僧都より佛法五戒を受けられし意に依る。



五四、夢の浮橋

一品の宮病氣の爲め横川僧都は宮中より召されて京へ行く途中、小野に立ち寄りたれど尼は又初瀬へ参詣なし留守中なりき、浮舟は之を幸に僧都に嘆願し髪を下ろせり、間もなく此の話をも明石中宮より聞きし薫大將は大いに驚き、若し浮舟ならずやと喜び、四月八日比叡の参詣の歸途横川に立寄りたしと、浮舟の弟小君を案内に出かけたり、僧都の話に依り小野に身をよするは愈々浮舟なることを突止めたり、僧都は薫の君の愛人を輕卒にも尼にせしことを後悔せり、薫大將は僧都に小野への案内を乞ひしが、一度世を捨てたる女の許へ昔の恋人を導く事は佛罰も怖ろしくと應ぜざりしかば、僧都に文を書かせ又自らの消息をも添へ小君を小野に遣せり、僧都も亦妹尼に事情を申し送れり、小君を迎へし浮舟は弟を懐しみ、心は千々に思亂れしが、もの憂き過去を忘れ今の身の存在を人に知られるをいとひ、手紙を受け取りしまま、顔をそむけてよよとばかり泣き入りたり、小君は姉の無情を怨みつゝ、打ち萎れて空しく歸れり、薫大將はこの事を聞きて切なる心遣る方なく悲嘆せり、感情にもろい浮舟のことだから、或は又他に愛人が出来て居るのではあるまいかと考へ居たり。

世の中は夢の渡しか浮橋の

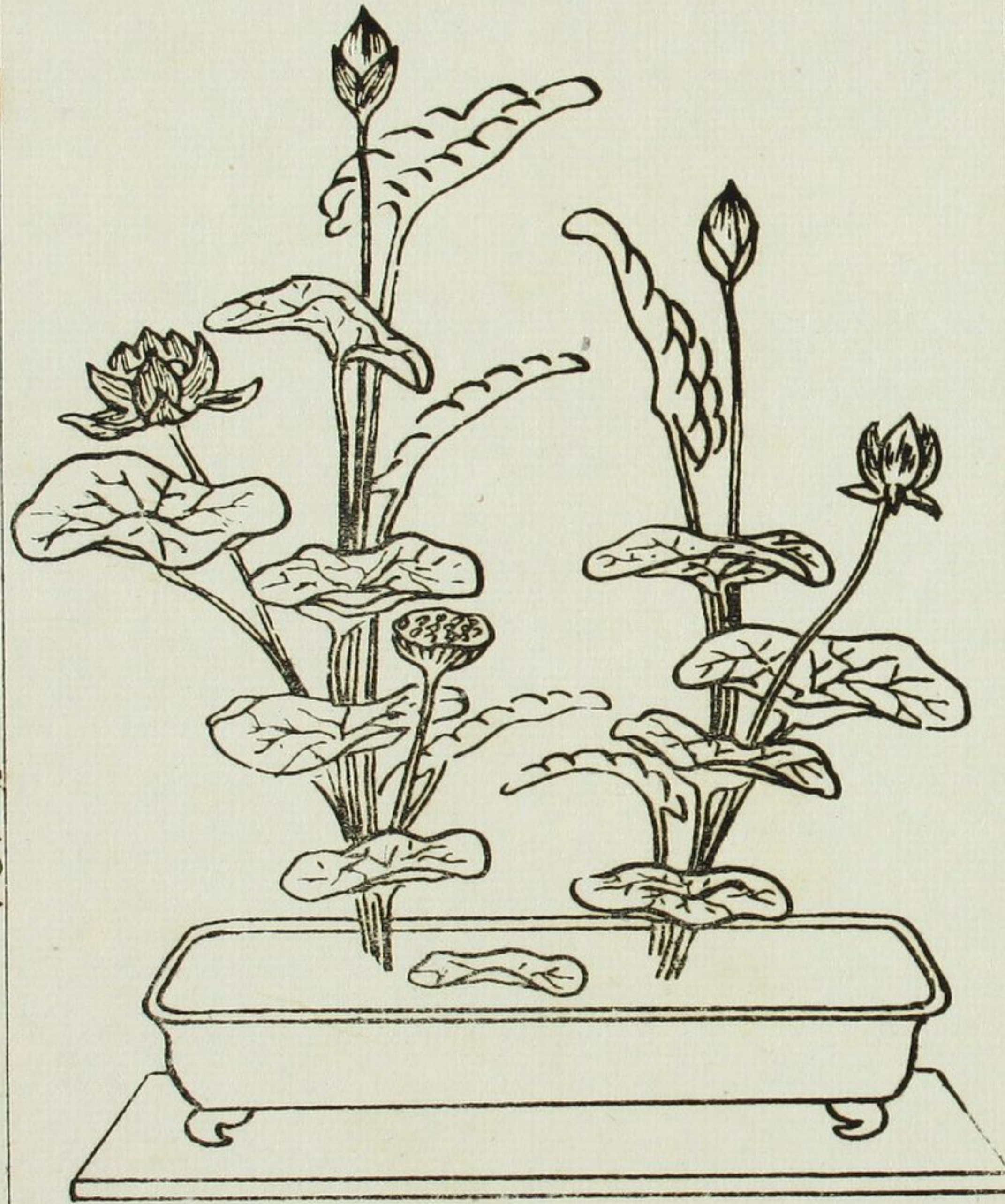
うち渡しつつものをこそ思へ

(註) 夢の浮橋とは夢の如くにして、桐壺の卷に何れの御時とおほしく書き出し、夢の浮橋の終りにいぶかしく書き捨しは、偏に夢の浮橋の如しと云々。

花 説

頃花花生器
夏鉢砂白蓮
材方

根元に開葉を遣ひ水際に浮葉を遣ふ、開葉の下より浮葉の上に向ひて、卷葉にて橋を掛る又別株よりも卷葉にて橋を掛け、橋の兩椽と見立て間の透ひたる處浮橋なり。極秘事但し男株、女株の長短格別なく、四、五寸位ちがふがよし、夢の浮橋とは夢の中の通路にかくる橋と云ふ意の言葉也、浮舟の前半生は薫につき匂宮に通し、後半世は剃髮して佛弟子となり、清き生活に入れるより蓮を遣ひて浮橋を作る也、花器砂鉢は橋の縁によりて用ゆる也



源氏物語發起

一、明星抄曰紫式部上東門院に官女して伺候のころ、上東門院の大齋院よりめづらかなる物語や、待ると所望なりしに、うつほ竹とりやうの物語は目なれたれば新らしくして作りて奉るよし、式部に仰られければ則作之奉ると云ふ。

此物語の大意

一、此物語一部の大意表面には、好色妖艶をもて建立せりといへども、作者の本意人をして仁義、五常の道に引かれ終に中道實相の妙理を悟らしめて、此世の善根になすべしとなり、されば、河海抄にも君臨の交り、仁義の道好色の媒菩提の縁にいたる迄、是をのせずといふ事なしといへり、

弄花の起同

一、凡内典外典は千萬軸にして難解難入也、仍權化の方便をもて一代權實内外の書典の意旨をひろひて萬法をのせて明らかなる事、鏡に向ふがこときのみかといへり、然れば則天地も始終あり、況や人間においておや、是に仍て盛者必滅會者定離生老病死有爲轉變の理を深くしめす。此上において世間常住壞空の法文をたて、煩惱即菩提の文此物語の大意也。

源氏物語之系圖

一、大上天皇

桐壺より卷御位にて久しくたもち給ひ、葵の卷に御位を東宮に譲りており爲させ給ふ桐壺の御門と申奉り榊の卷にて崩御ある也。

一、朱雀院

葵の卷に御位につき給ふみを盡しの卷に位を東宮に譲り、若菜の卷に御髪をおろし、西山の御寺にうつりすませ給ふ。

一、六條院

御母桐壺更衣按察大納言女

桐壺卷に生れ給ひ三歳にて御着袴、同年秋母御息所におくれ給ひ、七歳御父はしめ其年源氏の姓を給りてた、人になり給ひ、十二にて元服箒木の卷に近衛中將、紅葉の賀の卷に正三位、同卷に宰相、葵の卷に近衛大將と聞ゆ、榊の卷にて内侍のかんの君の事聞えて、須磨の卷に三月攝州須磨の浦におもむき、次の年三月明石の浦へうつろひ給ふの秋、御門の御夢によりめしかへされ、程なく元の位にあらたまり数の外大納言になり給ふ、みを盡しの卷に内大臣、薄雲の卷に車をやりて宮中を出入給ふ、乙女の卷に大政大臣、同卷に忠仁公の測にて准三后の宣旨を下さる辛の護持の申きかせ奉りしことを思食と、藤の裏葉の卷に管下禮を改たふとひ給ふ六條院と申、此御歳三十六光かくれ給ふよし匂兵部卿の卷に見えたり、光君とはこま人のつけ奉るとそ。

一、冷泉院

明星抄曰此物語は帝王四代七十餘年の間の事を今眼前に見るか如くしるせりと云ふ。

右華式源氏之卷致授與候畢自今出精
專用候事

文久三年十月編纂
大正七年四月改版
昭和二年九月再版
昭和二十五年三月改版

著作權
所有

專敬流華道家元

華流亭

著者兼發行者

林莊右衛門



